文様花千様



文祿役と平壤

發刊の辭

著者は嘗て日露戰役の際國際公法の顧問として乃木大將に旅順に隨ひ學理を實地に適用し或は間島問題の研究家として將た亦其當局者として間島に行動し大に世に貢献せられたるは普く人の知るところなり近來多年我教育會の會長として朝鮮教育の爲めに盡瘁すると同時に其專攻學科の參考として每に國際勢力の消長に留意し其沿革を研究するを忘れられす從て歷史に關する造詣亦深く此方面に於ても我會員を稗益せられたること甚た多かりしか今回其研究の一部たる文祿役と平壤の關係を發表することゝし其著作權を本會に寄附し且つ之れ

か發行に關し多大の助力を與へられたり本書は平壤に關する文祿役の研究として未た曾て見さるところにして歷史教育の參考書として有益なるのみならす社會各階級を通して必讀するの價値ありと信し茲に之を奇厥に附し廣く世に頒つことゝせり讀者之を諒せよ

大正八年一月

平安南道教育會幹事

序

平壤は朝鮮の舊都にして、遠くは檀君、箕子、樂浪、高勾麗の昔より、近くは文祿、日清の役に至るまて幾多の史蹟に富み、牡丹臺の名勝、大同江の風景と共に普く世に知られたる土地てある。隨つて內外觀光の客、來つて此地を訪ふ者四時其跡を絶たぬ有樣てある。余は平壤に在ること既に八年餘、此間此等の人々に對して平壤に關する歷史を說明したること幾十回なるを知らぬ程てあるか、固より歷史專門家に非さるを以て、其說明の或は正鵠を得さるものあらんを虞れ、暇あれは則ち日鮮古今の書籍を繙き、或は之を現地と對照して、其大綱を獲ることに努めた積りてある。本書は其史實中最も

母國に關係深き文祿役の部分を記述したるものにして、今後の觀光者中歷史に趣味を有する人々に對し、說明の便に供せんこ試みたるに過きぬのてある。若し夫れ微に入り細を穿ち、隱れたる史實を闡明し、或ば古來の疑問を斷定するか如きに至りては、固より歷史專門家の事業にして、吾人の能く企て及ふ可からさることなるか故に、他日或は學者の研究により本書に記載したる史實の或部分を訂正するの必要あるかも知れぬ。卽ち斯の如き部分に關しては、幸に學者、專門家の高敎に待つのみてある。

著　者　識

＝目　次＝

一、征明軍の威容……………………………………一
＝發達せる我戰術＝毒瓦斯と迫擊砲＝文祿役の目的＝太閤の大日本主義＝天笠南蠻までも＝征明軍の兵數と其編成＝急先鋒小西行長＝

二、國都の占領…………………………………一七
＝釜山東萊の占領＝忠州の陷落＝京城官民の狼狽＝國王の蒙塵＝行長國都に入る＝

三、平壤の陷落…………………………………二七
＝諸軍の部署＝臨津江の激戰＝國王義州に奔る＝明使の狀況偵察＝軍使大同江上に會す＝平壤の防備＝鮮兵の夜襲＝行長の渡河＝牡丹臺の占領＝鮮兵守を棄て遁

る――行長長驅せんと欲す――
四、美人桂月香……………………………………四三
――平壤の口碑――美人の事蹟――勇士金應瑞――降倭の問題――
五、明兵の全滅……………………………………五〇
――遼東の勇將祖承訓――明兵との初手合せ――明の馬、鬼頭獅面に驚く――行長の武者振り――史儒の戰死――明軍泥濘中に全滅す――考證を要する史實――
六、後方との連絡……………………………………五七
――後方連絡線の妨害――黑田長政の剛勇――長政溺死せんとす――鮮兵遠くより平壤を圍む――三路進擊の失敗――
七、講和問題……………………………………六二
――講和問題の眞相――策士沈惟敬來る――講和問題は一時

の方便‖行長詒かる‖沈惟敬の人物‖七ヶ條の約束‖
沈の詭辯‖講和問題の發展‖

八、明の大軍の來襲……………………七四

‖間諜捕へらる‖敵の來襲を知らす‖李如松行長を欺く‖日本軍の兵力と明軍の兵力‖

九、平壤の大激戰……………………七九

‖日本軍の配備‖行長牡丹臺に陣す‖行長の夜襲‖物凄き光景‖休戰の交渉‖明軍の大攻擊開始‖日本軍毒死斯に苦めらる‖朝鮮征伐記の記事‖含毬門敗る‖小西主殿助の戰死‖平壤續志の記事‖七星門普通門亦敗る‖日本軍の損害‖當時の平壤城‖

十、行長の平壤撤退……………………九八

‖李如松薄暮兵を收む‖大友の援軍遂に來らす‖開城

會議‖夜半大同江を渡りて退く‖長政大に行長の兵を
慰藉す‖感慨無量‖

‖目　次‖　（終）

文祿役と平壤

法學士　篠田治策述

一、征明軍の威容

……發達せる我戰術……毒瓦斯と迫擊砲……文祿役の目的……太閤の大日本主義……天笠、南蠻までも……征明軍の兵數と其編成……急先鋒小西行長……

不出世の英雄豐太閤によりて企てられたる征明の大役は千載の下、情夫をして起たしむるの慨かある。此大事業は太閤の薨去により、半途にして挫折したりと雖、我國の武威を大陸に輝かし、我國民をして自尊心を起さしめたる効果は實に偉大である

今日に於て吾人は外國と戰つて負けるといふ考は更に起らない事實に於ても日淸、日露の兩戰役に證明せられた通りてある。殊に文祿慶長の役に於ては元龜天正の亂世を經て、其戰術は最も發達し、將卒は百戰錬磨の勇猛無比の武夫てあつて、其戰鬪振りは如何にも痛快てあつた。之を大局より批評すれは或は外交に拙てあり、或は敵海軍の打算を誤り或は平壤以北の進擊を中止せしめ、或は淸正の精銳をして目標以外の方向に行動せしめたる等、其失策は必すしも尠からすと雖も、個々の戰鬪に就て之を見れは、巧妙なる戰術と、勇猛果敢なる接戰を以て、遺憾無く日本武士の面目を發揮して居る。歷史專門家の說によれは元龜天正の頃は、我國に於て戰術の最も發達したる時代てあ

つて、近世歐羅巴の戰術は只兵數と武器の相違のみで、多くは既に其頃我國で實行せられて居るといふことである。又當時日本兵の接戰に長したることは、當時朝鮮の宰相たりし柳成龍の名著懲毖錄に、倭奴の長技は、鳥銃と用劍と、突進との三者である、朝鮮の長技は一弓矢のみた、弓矢は數十步の間に用ゆへきも、鐵砲は則ち數百步の外にありて中れは必す穿透し、固より既に相敵せさるに、更に短兵を以て相接するに至つては、則ち朝鮮兵は最も不得手であり、忽ち奔潰して到底勝算無しと書いてある。國朝寶鑑其の他の書籍にも、日本兵は太刀を振り翳して後より斫殺し、朝鮮兵は頸を延へて刀を受くとある。其他當時の日本軍の特徴は、攻城に際しては先登第一の功名を爭ひ

野戰に當りては多くの場合に、一軍の大將が身命を輕んし、率先して敵中に突入し、縱横奮擊することであつた。以て當時如何に我軍か攻擊精神に充ち滿ちて居つたかを推察するに難からすである。而して敵も亦此戰役に於て、新式の武器卽ち迫擊砲及ひ毒瓦斯を使用して居る。行長の平壤敗北は毒瓦斯か確かに一原因である、海東繹史等の記事によれは、明軍は毒火、神火を放ち、諸箭城に入りて毒煙空に充ち倭兵は皆昏眩仆嘔した、明兵は解藥を含み其毒害を防き、蟻附して城に上りたるに、倭の强賊も遂に敗奔したとある。迫擊砲は日露戰役旅順の攻擊に於て、煙花の名所たる豐橋出身の今澤中佐か、煙花の筒より爆彈を打出すことを工夫したもので、近時各國共に之を使用するに

至つた。文祿役に用ゐたる迫擊砲は朝鮮の火砲匠李長孫か發明したる飛擊震天雷と名くる爆彈てある、其製法は詳かならさるも、大碗口を以て之を發すれは能く飛んて五六百步に至り、地に墜ち良々久しくして、火、內より發して爆發し、賊最も此物を畏れたとある。左兵使朴晋は之を用ゐて慶州を回復したことかある、卽ち夜、城下に迫り飛擊震天雷を發したるに、爆發すれは聲天地に震ひ、鐵片星碎を飛散し、中りて斃るゝもの多く日本軍は其製を知らす、皆以て神となし、翌日城を棄てゝ西生浦に逃れ歸つたのてある。近時歐洲戰爭に鑑み、我國にても漸く近年に至り毒瓦斯の研究を始めたか、既に三百數十年前に苦き經驗を嘗めたにも拘らす、全く之を知らさりしか如きは甚た

迂遠の樣てある。

文祿慶長の役を朝鮮征伐といふは不當てある、豐太閤の目的は大明四百餘州を征服し、更に天竺、南蠻まても皇化を及ほさんとしたのてある。渠れは近世の所謂大日本主義の最初の實行者てある。太閤か朝鮮の使者により朝鮮王に與へたる天正十八年秋の書狀に、一たひ超えて直に大明國に入り、吾朝の風俗を四百餘州に易へ、帝都の政化を億萬斯年に施さんは、方寸の中に在り、貴國先驅して入朝せるにより遠慮ありて近憂無きもの乎云々とあり。前田侯爵家の古文書に、太閤か當時諸將に配ちたる條目に朝庭を北京に移し、朝鮮には浮田秀家を置き、自分は濘波に在りて三國に號令する筈てあつたことを書いてあり。或

は鹿園日錄に主上か朕も明年は北京に移る筈なるによりて汝も（日錄の記述者京都相國寺の住職有節を指す）同行せよと仰せられし記載あり。其他朝鮮との往復文書、及ひ我か使臣の言議、幷に出師準備に關する幾多の記錄に徵するも、朝鮮には只途を借らんとしたのみであることは明白である。此趣旨は平壤攻擊の時にも、尙ほ小西行長より朝鮮側に申込んで居る。不幸にして前後七年に亘り、朝鮮は兵馬の巷と化し、百姓塗炭に苦みしも、朝鮮の當局者か日本の國勢を詳にせず、其向背を過つた結果であつて、當時の國情としては亦止むを得なかつたのである而して太閤は支那を統一するのみならず、進んで天竺、南蠻をも征服するの雄圖を有したることは有力なる史料がある。卽ち

文祿元年六月三日附の朱印狀に「匪啻大明」、況亦天竺、南蠻可如此」の記載かある。然るに天彼に年を假さす、中道にして薨去したのは、實に惜みても餘りあることてあつて、賴山陽も太閤を評して、其人と爲りは酷た秦の始皇、漢の武帝に肖て、而して雄才大略は遠く其右に出つ。若し渠をして女眞、韃靼の間に生れしめ、而して之れに假すに年を以てせは、明朝を覆へす者は、必すしも愛親覺羅氏を待たさるを知らんやと曰つて居る。

卽ち此戰役の結果より見れは、無謀の師を起したるか如きも、假すに時日を以てせは必ず其目的を達し得たることは賴山陽の言の通りてある。當時支那の形勢は明の末葉にして、其後四十餘年を經て遂に亡ひたるか如く、久しく文弱の弊を受け、國防

の如きも甚た疎なりし事は、支那この貿易に從事せる者等より夙に探知せるところにして、反之我國に於ては天正十三四年頃より、諸國の檢地を爲したる爲め租税は增加し、財政は非常に豐富となり金銀の產出も益々增加して上下一般に富裕こなり、交通運輸の便も大に開けて、外征の師を起すには最も好時機てあつたのてある。(黑板博士「國史の研究」)
征明軍の兵數は書籍によりて異同あれとも、武家事記所載の「道行之次第」こ題する文書によれは、(池内文學士「文祿慶長の役」參照)

一番　三月朔日より日和次第

一、七千人　小西攝津守

一、五　千　人　　羽柴對馬侍從（卽ち宗義智なり）
一、三　千　人　　松浦刑部法師
一、二　千　人　　有馬修理太夫
一、一　千　人　　大村新八郎
一、七　百　人　　五島大和守
以上一萬八千七百人
二　番　　一番之次日和次第
一、一　萬　人　　加藤主計頭
一、一萬二千人　　鍋島加賀守
一、八　百　人　　相良宮內少輔
以上二萬二千八百人

と三番以下十六番まて、及ひ船方衆を併せて都合二十八萬千八百四十人とあり、此內には名護屋に在陣したるものありて、海を渡りし軍を區別せす。又帝國大學史料編纂掛備付本黒田文書中、正月五日(文祿元年)の日附を有する朱印狀にも、一番より八番まては右と同樣の記載あり、淺野家の文書にも「からいりみちゆきの次第」と題する內に、一番より十四番まて兵數を示さゞるも人名は同一の記載かあるといふことてある(からいりは唐卽ち明に入るの義なり) 此等の古文書の記載か、殆んと一致するところを見れは、其兵力を想像するに難からすてある。而して小西軍の兵數か、一萬八千七百人なりしことは各記錄の一致するところなるも、右の朱印狀には松浦、大村、五島の兵

數の下に「晉請半分」の記載あり、何れかの工事に半數を使用したものかとも思はる。又水戸藩の彰考館編修總裁川口長孺の著したる征韓偉略によれは次の通りてある。此書物は各種の文書記錄を考證して編纂したものにして、信用を措くに足るものと思はるゝか、卽ち陸軍の第一隊は小西行長、宗義智、松浦鎭信有馬晴信、大村嘉前、五島純玄、第二隊は加藤清正、鍋島直茂相良長安にして此兩隊を先鋒とし、籤を拈て隔日に役せしめ、第三隊は黑田長政、大友義純、毛利吉成、島津義弘、高橋元種秋月種長、伊藤祐兵、島津忠豊、第四隊は福島正則、戸田氏繁第五隊は蜂須賀家政、第六隊は長曾我部元親、生駒親正、來島兄弟、第七隊は小早川隆景、立花宗茂、久留米秀包、高橋直次

筑紫廣門、第八隊は毛利輝元にして總勢十三萬餘人、海軍は九鬼嘉隆、藤堂高虎、脇坂安治、加藤嘉明、久留島通泰、菅達長等九千二百人として先つ之を出發せしめ、徳川家康、豊臣秀俊前田利家、佐竹義宣、伊達政宗、蒲生氏郷、最上義光、森忠政等七萬人さ、其餘の兵士六萬人を以て名護屋の防備及ひ豫備隊とし、總軍は三十萬七千九百八十五人、輿隷水手の類を併せて四十八萬人とある。日本外史には水陸九軍總て十五萬人を派遣し、遊兵六萬を以て應援に備へ、徳川家康、前田利家等の諸侯十萬人を以て名護屋に會せしめたと概數を示してある。黑板博士の「國史の研究」には朝鮮へ繰出した兵は凡そ十五萬八千七百人て、之に水夫とか人夫を加へると更に大きな人數になつたに

違ひないと云つて居る。又朝鮮征伐記には一方の先手小西軍一萬八千七百人、一方の先手加藤軍を二萬二千八百餘人とし、以下第八隊までと水軍を合せて都合二十五萬四百餘人の到着なりとあるも、各軍を合計すれは十七萬人餘となる。其他名護屋の守備は十萬五千四百十五人とあり、多少前記諸書と異るところあるも、要するに最初海を渡つた戰鬪員は約十五六萬人と見れは大差なしと信す。而して京城陷落後、元帥宇喜多秀家及ひ增田長盛、石田三成、大谷吉隆の三奉行は兵六萬を率ひて京城に來た、故に征明軍の總兵力は二十一二萬に達したのであらふと思はる。

以上の如く勇士猛將雲の如くある中に、先鋒の大任を命せられ

たる小西行長は、實に此戰役の花形役者である。其膽力に於て軍人氣質に於て同僚加藤清正に比すれは、稍々見劣りするところはあるか、藥種商より身を起し、豊太閤の信任を得て此大任務を命せられたるを見れは、彼も亦非凡の英傑であつたに相違ない。外交の事情に暗く、沈惟敬に籠絡せられて、九仞の功を一簣に缺きたるの過失はあるも、釜山上陸以來戰へは必す勝ち攻むれは必ず取り、疾風の落葉を卷くか如く、直ちに國都を陷れ、長驅して遂に平壤を奪ひ、旌旗直ちに鴨綠江を指さんとしたる作戰動作は、決して常鱗凡介の品彙匹儔てはない。大小數十戰能く先鋒の任務を盡し、後續部隊をして大なる勞苦なくして國都に達せしめたるの功績は、本戰役間の殊勳を以て論すへき

である。平壤占領後行長は直ちに總司令部に報告し、平壤以西は復た支ふるもの無し、鴨綠江より明の北京に至る百餘里に過きされは、全軍甲を卷て之に趨き、彼をして備ふるに及はさらしめは志を得ること難きに非すとて京城に滯留せる諸將の進發を促したるも、總司令官宇喜多秀家は三奉行と議して、全羅、江原の二道未た定まらす、深く侵入するは不可なり、且つ水軍か全羅道を循つて、北の方黃海に進出するを待て、水陸並ひ進むは萬全の策なりとして行長の意見を用ひす、其進擊を許さゝりしは大失策であつた。行長は止む得す孤軍を以て平壤を守り曠日彌久、遂に明軍をして充分に準備をなし、大擧して來襲するに至らしめ、援軍來らす、衆寡敵せす、平壤を撤退せさるを

得さるに至り、引て全局に影響を及ほすに至りしは、實に千載の遺恨てある。文祿役ご平壤は斯の如き重大の關係を有するか故に、史實に照し現地に就て、少しく當年の戰況を研究するも亦無益の業に非すご信するのてある。

二、國都の占領

……釜山東萊の占領……忠州の陷落……京城官民の狼狽……國王の蒙塵……行長國都に入る……

文祿元年は明の萬曆二十年朝鮮の宣祖二十九年てある、此歲三月朔日、小西行長は加藤淸正等ご共に京師を出發し、三月十日

名護屋に到着し、同十二日辰の刻に總軍纜を解き順風に帆を擧げて名護屋の浦を出帆した。烟波渺々たる海の面、數十里の間大小の船艦舳艫相含み、各船には定紋の慢幕を繞らし、思ひ思ひの旗、金銀の指物馬印は旭日に輝き、甲の星を輝かし、鎧の袖を列へたる勇士の面々、屋形の內に居竝ひて軍歌の聲勇ましく、威風堂々意氣旣に敵を呑んた光景は、今より之を想像するも血沸き肉躍るの感かある。凡そ出征の船出程勇壯なるものは無い。余は嘗て日露戰役の際、戰時公法の顧問として乃木將軍に隨ひ、汽船八幡丸に塔乘して宇品を出帆したることあるか、巨艦艨艟舳艫相含み玄海の怒濤を蹴つて旅順に向つた當時の壯觀を回顧して、其光景を聯想せさるを得ぬのである。其日壹岐

の風本の港に着し、順風を待つこと十餘日、風浪未た衰へさりしか、行長は諸將に先んして出帆し、二十六日對馬の豊崎の港に着、更に四月十三日釜山に上陸した。途中の行程に關しては種々の說あれとも、四月十三日に釜山に上陸したことは、西征日記、吉野覺書、松浦家紀、其他の記錄と朝鮮の諸記錄等と一致するか故に正確てあると思はる。行長は釜山に上陸し、直に釜山城を陷れ、守將鄭撥以下三千五百七十三人を斬り（太閤記には八千五百餘人とあり）二百十二人を擒にし、更に進んて東萊を攻め半日にして之を拔き、守將宋象賢以下を斬り、十六日進んて梁山城を奪ひ密陽、仁同を經て尙州に入り、巡邊使李謐を走らしめ、更に聞慶等に於て敵を驅逐し、二十七日忠州に到

着した。行長は途中鳥嶺の險を過き、敵か此險要を守らさるを見て其爲す無きを知つた、後年明の李如松も南進した時に、忠州の役に朝鮮の大將申砬か鳥嶺の險を守らさりしを歎したこゝふことてある(懲毖録)。忠州は京城を距る三十餘里。國都の防禦線にして最も重きを置た要害てある。然るに守將申砬は兵法に暗く、自ら出て、彈琴臺に陣したるも、其地左右に水田多く或は水草繁茂して馳驅に不便なりしかは、行長は自ら先頭に立つて之を急擊し、難なく之を陷れ、申砬以下九千二百十人を斬つた。是より先き淸正は釜山より別路を取り、慶州を陷れ、永川、義興、比安、龍宮等を經て聞慶に出て行長こ忠州に會した而して或書物には淸正か忠州攻擊に參加したと記せるものもあ

る行長と清正とが爭論した有名なる話は、即ち忠州に會合した時であつて、即ち忠州郊外に於ける、京城進擊の評議の時、宗義智か京城の地圖を擴けて之を示した際に、圖中京城の司馬門內に藥店路といふ市街かあつた、淸正は行長か藥種商より出てたるにより、戲れて貴公は此路を取つては如何と謂ひしに、行長は己を侮辱するものとして大に怒つた、鍋島直茂は笑つて之を解いたか、夫れより進路に關し爭論を生し一大事に至らんとしたるも、之れ亦直茂、鎭信の仲裁により淸正、行長共に愧服し、諸將相共に宴を張りて歡醉せるも此確執は他日關ケ原役に顯はるゝに至つたのである。

懲毖錄、國朝寶鑑其他朝鮮側の書籍によれは、京城にては李謚

申砬等か尙州、忠州に於て能く敵を防拒し得へしと信し、頗る之に信頼し居りて、人々其捷報の到るを待ちつゝありしか、二十九日の夕刻に至り氈笠を被りし者三人、馬を走らして崇仁門に歸り來りしにより、人々爭ひて戰況を問へるに彼等は答へて曰く、吾等は巡邊使軍官の奴僕なるか、昨日の戰にて巡邊使は忠州に戰死し、諸軍大敗したるにより、家族をして京城より避難せしめん爲め、身を以て逃れ來りしなりと。京城の人々は之を聞て大に驚き大混雜を惹起した。廷議車駕は平壤に幸し、諸王子を諸道に分遣して勤王の士を募らしむることゝした。然し中には京城抛棄に反對せる者もありしか、此時尙州に敗れし李鎰の報告書來り、今明中に賊は京城に入るへしとありしにより

上下益々狼狽して、車駕は直に出發することゝなつた。宮中の衞士も禁衞軍も盡く奔竄して、車駕に扈從するものは甚だ少數であつた。途中大雨に遇ひ一行皆沾濕して困難を極めたが、臨津江を渡り漸く東坡驛に着した時、牧使が食事を用意したるに扈從の人々終日食はす飢餓に迫りしにより、忽ち厨中に亂入して、手當り次第に食餌を搶奪し、王に奉る物は無くなり、牧使等は恐縮して逃亡して仕舞つた。翌日に至り京城より來りし吏卒も遁散して扈從の人無きに至りしも黃海道の監司趙仁得が兵を率ひて來り迎へ、途上にて、食事を用意し、百官始めて食を得て、此日漸く開城に到着することを得た。王は開城に留まること二日、親しく南門樓に御し民人を聚めて慰諭し、或は己を

罪する書を八道に下し、使を遣はし義兵を召募せしめ、更に開城を發して平壤に到つたのである。

是より先き忠州に於て諸將軍議の結果、行長、清正は二道より進むことゝなり、行長は忠州を出て驪州にて江を渡り、楊根渡龍津を經て京城の東大門に迫り、清正は竹山、龍仁を經て漢江の南に出て、江を渡りて南大門に向つた。時に都元帥金命元は濟川亭にあり日本軍の到るを望見し、軍器、火砲を江中に沈め服を變して遁走し、京城の守備を命せられたる李陽元も、亦城を守る可からさるを見て出てゝ揚州に走つた。行長は五月三日東大門に到りしに門扉堅く鎖され城中防拒の兵無きも城に入ることを得さりしか、漸く水口門の鐵柵を破りて城に入り、東大

門内の北方高地に陣し、兵を遣して先つ宮門及城の四門を守らしめ、其他要所に兵を配置して逆襲に備へた。然るに清正は一日後れて南大門に到りしに、行長の兵既に門を守るを見て大に失望せしが、此後十數日間京城に滯在し後續部隊の到着を待つた。然るに黑田長政等は釜山に上陸後途を金海に取り、星州茂溪縣にて江を渡り、知禮、金山を經て忠清道永同に出て、進んて清州を陷れ相次て京城に入り、其他の諸將も以上の三路により、相前後して京城に到着し、後方の連絡は各地の要害に「つなきの城」を築きて守備兵を置き、緩急あれは烽火を擧けて相應することゝし、大に明を攻むるの方略を研究した。京城の住民は一時は皆遁逃したりしか、日ならすして稍々還り來り、市

中に商店を開き物資の賣買を始めた。日本軍は城門を堅守せるも、朝鮮人に票札を與へて出入を許したるにより、住民は皆此票札を受け、或は日本軍の爲めに勞務に服するに至つた。然れども軍律は至て嚴格に行はれ、若し日本兵を殺さんことを謀り事顯はれたる者の如きは鐘樓前及ひ崇禮門外にて燒殺の刑に處せられた。（燃黎室記述）

三、平壤の陷落

……諸軍の部署……臨津江の激戰……國王義州に奔る……明使の狀況偵察……軍使大同江上に會す……平壤の防備……鮮兵の夜襲……行長の渡河……牡丹臺の占領鮮兵守を棄て遁る……行長長驅せんと欲す……

京城にて軍議の結果、小西行長は明への通路平安道に、加藤清正は咸鏡道に、黑田長政等は黃海道に、島津義弘等は江原道に進擊すること、なりしにより、行長、淸正、長政等は相前後して京城より北進し、淸正は開城より分れて咸鏡道に向つた。是より先き朝鮮の都元帥金命元は、臨津江に於て日本軍を阻止せんと欲し、諸軍を江灘に配列し且つ江中の船を皆北岸に集めて

防拒の計をなした。日本軍は進んで臨津江に至りしも、渡ることを得す數日間滯陣したるか、遂に一計を案し、敗走の狀を爲し敵を誘出して之を擊滅せんとした。乃ち精兵を山後に伏せ、江岸の廬幕を焚き、帷帳を撤し、軍器を收めて退却の狀を爲したるに、敵は果して之を信し、江を渡つて進擊した。然るに伏兵一時に起て、之を要擊したる爲め敵は忽ち大敗し、走つて江岸に至りしも渡ることを得す、巖石の上より江中に投して死するもの算なく、其未た江に達せさる者は多く斬殺せられた。懲毖錄には此時の狀況を「軍士奔至江岸不得渡。從巖石上自投入江。如風中亂葉。其未及投江者。賊從後奪長刀斫之。皆匍匐受刀。無敢拒者」と記載してある。臨津江の天險も斯の如くにし

て敗れ、金命元等の諸將皆平壤に逃走した此戰鬪は朝鮮側の記錄によれは五月十七日てあるか我國の諸記錄によれは二十七日となつて居る。

是より先き五月八日國王は平壤に到着し、平壤の監司宋言愼三千餘騎を領して車駕を迎へたるにより、國王以下始めて安堵の思を爲したるか、十九日に至り臨津江大敗の報到り、上下復た膽を喪つた。是に於て閣議を開き、車駕は此地に留まるへきや否やを評議したるか、平壤は京城の比に非す、必すしも此地に留るの必要なき故、一大將をして之を守らしめ、車駕は平壤を去るを可とする者多數なりしか、尹斗壽、李幼澄、朴東亮の三人は大に此議論を不可として曰く、此地を捨て、北道に行くも

則ち窮すれは去るへきの地なく、鴨綠江を渡らは則ち國土を捨つるものにして復た如何ともすへきなし、平壤は四面絕險、守るは易く攻むるは難く、且つ軍士萬人あり、糧食亦多く以て死守すへきなりと。然れとも國王は意氣旣に阻喪し亦留まるの意無く、或は咸興に向ふへしとの意見を有するものもありしか、先つ寧邊に到り、事危けれは更に義州若しくは江界に行くへしとの議を定め、六月十一日に車駕遂に平壤を發して寧邊に向つた。發するに臨み、平壤の民衆は失望と憤怒とにより騷擾を惹起し、宮門を破壞し宮人を要擊し殿上の人平時厚祿を食みなから賊を禦く能はす、君主を要して又吾等を棄去らしむるは不都合なりと罵り、門外に塡塞して大混雜を極めたるにより、監司

宋言愼は首魁三人を斬り、李幼澄は「停行」の二字を板に大書して屋上に登り、遍く之を民衆に示して漸く民衆を解散せしめた日本軍は既に臨津江の險を破り、進んで開城を占領し、小早川隆景は開城を守り、黒田長政は更に進んで白川に至り黄海道を制し、大友義統は平壤の南十四里の鳳山に屯し、且つ平壤この間に二個處の砦を築き、行長と義統の兵を分屯せしめ、以て京城この連絡を有ち、小西行長こ宗義智は六月八日進んで大同江に達し大同門の對岸附近より今の船橋里の附近一帶に陣取つた平壤の戰闘は朝鮮側の著書によりて研究するか最も便利てある日本側の記錄は地名、時日等不正確なるもの多く、又稍もすれは軍談本的に流れ、徒に形容の詞多く、事實の眞相を得難きも

のかある。朝鮮側の書籍も戰勝の場合等には誇大に記載せるものあるも、懲毖錄、燃藜室記述、海東繹史等は最も信を措けるものと思はる。

懲毖錄は前にも述へた如く、當時の宰相柳成龍の著書にして、同書は殊に當時各地より來りし狀啓を連載してある。即ち渠れ自ら實見した事及ひ此等の公文書に基て記述してあり、我國の著書にも大に此書を引用して居る。

燃藜室記述は純祖の頃全州の學者李旨翊(燃室藜は其號なり)の著はしたるものにして、約四百餘種の野史隨錄、日記、文集等より廣く史料を綴拾したる著述てある。

海東繹史も韓大淵といふ學者か五百數十種の書籍より輯錄した

したるものにして、前者と其體裁等も類似して居る。其他平壤續志、亂中雜錄、再造藩邦志等も亦參考とすへきてある。

懲毖錄によれは此時明の遼東の都司は、部下の林世錄を使はし、朝鮮に來つて狀況を探らしめた。蓋し明にては日本軍か急に朝鮮を侵し、忽ちにして國都を陷れ、國王は出て走り、日ならすして既に平壤に迫るこの情報を信せす、或は朝鮮か斯る口實を設けて、日本軍の先導を爲すやも計れすとし、使者を遣はして、實狀を偵察せしめたのてある。柳成龍は平壤にて其接件役を命せられ、共に練光亭に上りて對岸の形勢を望察した。時に一日本兵か對岸の林木の間に隱見し、更に二三の兵か續いて出て來り、路傍に休息せるの狀か見へた。柳成龍は林世錄に之を指し

示し、之れ卽ち倭兵の斥候なることを告けた。世錄は練光亭の柱に倚りて之を望見して居つたか、殊さらに之を信せさるの狀を爲して、倭兵としては其數甚た少しと曰つた。柳成龍は日本兵は巧に人を詐はり、大兵後に在りと雖も先つ來て偵察する者は毎日數輩に過きす、若し其少きを侮り備をなさゝれは、則ち必す其術中に陷ることを告けた。世錄は始めて其實狀を知り、馳せ歸りて之を報告し、明は遂に援兵を出すことになつたのである。

日本軍は大同江に到着して三日目に、書狀を木片に挿み江沙の上に樹て置きしか、朝鮮側より火砲匠金生麗をして小舟に棹して之を取らしめた。時に日本兵は武器を帶ひすして出て來り彼

と握手して最も鄭重に狎々しく談話して此書を托した、此書狀は日本軍の平調信、僧玄蘇より朝鮮の李德馨に宛て會見を申込んだものであつた。則ち平調信は柳川調信のことにて宗家の家老であり、玄蘇は博多聖福寺の僧にして、戰役前對馬に寄寓したるものである、此兩人は開戰前に宗義智か秀吉の命により、朝鮮王をして來朝せしむへき使命を帶ひて朝鮮に至りし時隨行し、其結果朝鮮より使臣を日本に送りし時、同行して京都に來り、更に其使臣の歸るを送りて朝鮮に渡つた者である。李德馨は宣慰使として、義智等の日本の使臣を接待したことありて、互に面識ありしにより、遂に會見することになつた。日本側の申込は只中原に到る途を借るのみなるに、朝鮮聽かすして事此

に至つたのは甚た遺憾である、今日にても尙ほ日本に途を貸し、中原に達せしむれは朝鮮は無事であると云ふのであつた。朝鮮側は兎に角一旦兵を退けたる上に非れは、協議に應する能はすとて之を拒絕した。斯の如くにして此談判は不調に終り、日本軍は此夕刻より陣を江岸に結ひ戰備を整へた。燃藜室記述には、日本軍は大同江に到着した夜、俘虜に書面を持參せしめて李德馨と會見せんことを申込んだ。朝鮮側ては李德馨をして應接せしめ、和議成らされは勇士をして調信等を擊殺せしめんとしたるも、尹斗壽は國勢今日の如き狀態なりと雖も、盜賊の如き行爲を爲すは不可なりと論し、大に軍使の不可侵權を尊重した。翌九日に德馨は扁舟に乘して江中に至り、調信等と會見したと

ある。

平壤の防備は元帥金命元、柳成龍等は練光亭を守り、監察使宋言愼は大同門を守り、兵馬使李潤德は浮碧樓以下の江灘を守り、慈山郡守尹裕後等は長慶門（今の關帝廟の前の江岸城壁にありしか數年前道路工事の際取除かれた）を守り、城中の士卒民夫を合せて、三四千人ありしか之を分つて城堞に據らしめた。然るに此等は全く烏合の衆にして隊伍區分明かならす、或場所は密に失し、或場所は疎に失し、人上人あり肩背相磨し、或は數堞を連ねて一人も無き場所もあり、乙密臺附近の松樹の間には衣服を掛けて疑兵を設けた。日本軍は大同江の對岸に一字形の陣を張り、紅白の旗を樹てゝ兵威を示し、十餘騎を放つて羊角

島に向はしめ、或は江中に入り轡を按して列立し、將に羊角島に渡らんとするの狀を示し、或は江岸を往來する者は、三々五々大劍を拔き連れ、日光に反射して電火の如く閃き、鮮人の心膽を寒からしめた。又或は鳥銃を持て江邊に到り、城内に向て一齊射擊を爲すあり、音響甚た壯んにして、銃丸は大同江を過きて城中に入り、遠き者は大同館（今の第一公立普通學校）に達して瓦上に散落し、或は樓柱に中り人を驚かした。又紅衣を著したる一日本兵は、練光亭に諸將の會合せしを見て、進んで沙渚上に出て之を狙擊し二人を傷けた。朝鮮側よりも善く射る者を發し、船を中流に出して日本軍を射擊せしめた。火箭江を過くる每に日本兵は仰き見て叫譟して之を避け、箭地に落つる

や爭ひ聚つて之を視た、後には日本軍は之を侮り、平氣て大同江に入りて水浴を爲すものもあつた。斯の如く江を挾んて相對持し、日本軍は渡ることを得す、十餘屯の幕營を設けて分駐して居つた。元帥金命元は日本軍の警備頗る怠るの狀あるを見て、高彥伯等をして精兵四百餘人を選んて江を渡りて夜襲をなさしめた、是に於て高彥伯は浮碧樓下の綾羅島より潛に船を以て大同江を渡りしか、初め三更事を擧くる筈なりしも時期を失し、昧爽に至りて漸く渡河を終り、日本兵の未た起きさるに乘して其第一陣を攻擊した。此第一陣は宋義智の陣にして、鮮兵任旭景なる者先登して幕に入り、日本兵を亂斫したるか遂に戰死し、義智の兵一時は驚擾し、部將杉村智清等も戰死したか、義智は奮

戰し手から數人を斬つた。是に於て列屯の兵悉く起て逆襲し來りしにより、朝鮮兵は敗れ走つて船に還りしも、急追せられて水に溺れて死する者甚た多く、餘衆又王城灘より流を亂して渡り逃れ歸つた。日本兵は始めて淺瀬の徒渉すへき場所あるを知り、日沒に至り衆を擧けて此處より渡つた。然るに此地點を守りし朝鮮兵は敢て一矢を發せすして皆逃走した。王城灘は平壤續誌によれは「浿江上淤有王城灘」とあり、其地點を明記せさるも今の酒巖の下流、綾羅島の上流ならんと思はる、現に干潮の時は、平壤鑛業所のランチか航行困難を覺ゆることある程にて、流れは稍々急なるも至つて淺き場所てある。亂中雜錄の記事には中和の人嚮導をなし、通事金德謙か方略を助畫して、王

城灘より日本兵を導いたことあるも、彼等か淺瀬のあるを知り居たりとすれは、早く之を告くへき筈なるに、日本兵か數日間渡るを得すして、對岸に滯陣したるを見れは、此說は信を措き難きものである。此夜守將は城門を開きて盡く城中の人を出し、軍器火砲を風月樓の池中に沈め、順安及ひ江西方面に逃れ去つた。風月樓は大同門の內側、元愛蓮堂の西南にあつた。以前は此地に池あり池中の島に愛蓮堂と稱する堂かあつたか、此建物は併合前に內地に移され、今は東京澁澤男爵の邸內に建てられてある。日本軍は江を渡りしも城中に備あるを疑ひ、急に進入せす、先つ牡丹臺を占領したりしか、翌日に至り城中の空虛なるを望見し、乃ち城に入つたのである。城中には糧餉十餘萬石

を貯藏してあつたか、皆日本軍の分捕りに歸した。行長は捷を國都に在る諸將に報し、平壤以西復た我軍を支ふる者無し、鴨綠江より北京に至る百餘里に過きす、全軍甲を卷て之に趨くへきを主張したるは前に述へた通りてあるか、總司令部にて行長の意見に同意しなかつたのは、甚た遺憾てある。

柳成龍も平壤占領の勢に乘して、鴨綠江に到るは容易の業なるに、幸に賊は平壤に跡を斂めて數箇月出てす、順安、永柔の如き平壤より咫尺の地と雖も犯されさりしにより、人心稍々定まり、天兵を迎へて恢復の功を致すを得たのは、實に天裕てあると曰つて居る。行長は斯の如く實に文祿元年六月十三日、何の苦もなく平壤を占領したのてあつて、釜山上陸以來僅かに六十

一日目である。

四、美人桂月香

……平壤の口碑……美人の事蹟……勇士金應瑞……降倭の問題……

朝鮮王は六月二十三日義州に到着し、明の援兵を待つことゝなつた、明史には當時救援を請ふの使節か、絡驛相望んだとあるを見れは、王は屢々援兵を促したに相違ない。日本軍は平壤に留りて進擊せさりしにより、柳成龍は安州にありて明軍の接待及ひ軍糧蒐集に從事し、金命元、李元翼等は肅川、順安に駐屯し、散卒及ひ江邊の土兵を召集し再ひ軍容を整へ、日本軍と遙

に相對持して居つた。

平壤の口碑に傳つて居る妓生桂月香か、小西行長を抱ひて練光亭より大同江へ飛ひ込んたといふ、小說的の問題は此滞陣中の出來事てあつた。現に此美人の記念碑か練光亭の下にあり。又之を祭つた祠か第二公立普通學校の西側にあるこ義烈祠てある。此義烈祠は今の東亞煙草會社工場の後方にあつたか、數年前元山街道を開きしこき、其途筋に當るを以て今の場所に移したのてある。此傳說は晋州にて論介こいふ美妓か毛谷村六助を抱て、晋州の矗石樓から飛ひ込んたといふ傳說こ混同したのてある。行長は關ケ原役にて殺されたる故に大同江に飛ひ込んた事は無いのてある。兎角女か水て死ぬこ美人として持て囃さるゝか、

桂月香か美人てあつたか否かは不明てある。然も平壤は古來美人の産地てあり、今日ても妓生の本場として、內地迄も知られて居る土地てあり、名前か桂月香といふと如何にも美人らしき妓生なるか故に、先つ絕世の美人と認定して置くこして、偖て其事跡は平壤誌によれは次の如くてある。卽ち小西行長の副將に勇力絕倫なる者かあつた、此勇士は甞て先登して敵陣を陷れたる功勞ある者にて、行長は大に之を重用して居つた。桂月香は其勇士に捕へられたか、勇士は極めて之を愛幸し暫くも傍を離さなかつた。一日月香は西門に往て親屬に會はんことを請ひ、許されて城壁に登り、兄さん！兄さん！こ頻りに呼んて居つた。時に金應瑞こ呼ふ勇士か、我は卽ち兄なりこ稱して城に入つた。

月香は之を導きて練光亭に至り、夜右の倭將か熟睡せるを伺ひ之を斬らしめた。應瑞は其首を携へ月香を連れて城を出てんこしたか、到底兩人共に逃れ出つることは能はさるを知り、遂に月香を斬り城を踰て還つた。翌朝日本軍は勇將の殺されたるを知り、大に驚擾し氣を奪はれたといふのである。此金應瑞は初め金景瑞と稱し、平安南道龍岡郡の出身にして、現に同郡廳所在地より約一里程鎭南浦に近き地に其子孫か居住して居り、其家には種々の遺物を傳へてある。「金將軍遺事」と題する書には、其後講和問題の時、副使として日本にも使したることあり、慶長の役には慶尙道左兵使こして降倭數百を以て大邱を守り、蔚山役の後に日本軍をして、大邱以北に長驅侵掠せしめさらしめ

たとある降倭の事跡詳かならざるも、「慕夏堂文集」によれば日本人姓は沙、名は也可といふ者、幼より中國の文華を慕ひ、征明の役先鋒軍に屬して出征せしが、遂に其屬三千人を率ひて金應瑞に降伏し、姓名を金忠善と賜はり、慕夏堂と號し、朝鮮の爲めに盡したといふ事跡と、此事に關聯した種々の文章を集めてある、朝鮮通の河合博士、淺見學士等は此文集は後世の僞作であるとの意見なるも、當時投降した日本人のありしことは事實である、現に大邱の附近、達城郡嘉昌面友鹿洞に此男の墓かあり、其子孫も此地に住し、日本人の子孫なりと稱して居る、又毛利記には蔚山籠城の時、清正の臣岡本越後守、秀家の臣田原七郎左衞門なる者敵軍の中にありて、竊に來りて講和を議し

たとある。又前記「金將軍遺事」に淸正か烏山城（蔚山ならん）を守つた時に城中に水無く、每夜城外に出て、水を汲ましめた、金應瑞は部下の降倭を井の傍に伏せて、水汲に來る者を一々捕拿せしめたさある。凡そ三百年前の作製に係る平壤の舊地圖には、今の兵營の前方練兵場の附近に倭城さいふ地名かある。其他兵馬使鄭見龍か易水部（今の間島の一部）の藩胡を伐つた際にも、降倭牌を負ふて先登し、官軍之に次て敵地を陷れた記事かある、李适の亂にも降倭か大に働いて居る。兎に角當時降倭なる者か居つたことは明かなるも、其事跡は甚た不明てあるか故に、歷史家の硏究を希望する次第てある。蓋し此等は戰場に於て力盡きて敵に降りし者に非すして、元龜天正の亂世に、或は秀吉

に亡ほされたる者の遺臣等か、主君の仇の爲めに頤使せらるるを潔しとせす、朝鮮に降りし者等てはないかと思はる。卽ち今の歐洲兵か戰場にて生命を全ふせんかために、多數投降するか如きものに非すして、或る意味に於ける政治上の原因て朝鮮に歸化せんとしたるものゝ樣てある。金應瑞も其部下に若干の降倭を有して居つたのは事實てあらう、然し右の三千といふか如きは全く誇大の言てある。而して金應瑞は慶長役後約二十年を經て、朝鮮か明を援けて滿州(淸朝の前身)と戰つた時、明軍大敗し遂に滿州に降りて俘虜となり滿洲て病死したのてある。

(平壤練兵場附近の倭城は本書脫編後高麗時代に妖僧妙淸の築きし僧城より傳訛したる名稱なること判明せり)

五、明兵の全滅

……遼東の勇將祖承訓……明兵との初手合せ……明の馬、鬼頭獅面に驚く……行長の武者振り……史儒の戰死……明軍泥濘中に全滅す……考證を要する史實……

朝鮮兵が平壤を拋棄したるは六月十二日にして日本軍か平壤を占領したるは其翌日てあるこいふ說こ、十五日てあるといふ二說あるか、王城灘を渡りて牡丹臺を占領し、守城の兵は間も無く逃け出したるに拘らす、三日間も躊躇する筈は無いから、十三日占領說を正當とせねはならぬ。小西行長は平壤に滯留すること約一ケ月を經て、七月十九日に到り、明の遼東副總兵祖承訓は兵五千を率ひ來つて平壤を攻めた。元來此男は遼東の祖將

にして、屢々北虜と戰つて戰功ある者にして、甚た日本軍を輕視して居つた。平安北道の嘉山に到つた時、平壤の日本軍は我等の來るこ聞き既に逃走したるへしと土人に問ふた程てある。土人は尙ほ未た退かさるを語りしに、彼は酒を呼ひ、天を仰て大に喜ひ、天我をして功名を爲さしむるなりごて祝杯を擧けた。其後順安より出發し、夜三更進んて平壤を攻めた、時に大雨にて城上に守兵無き模樣なりし故、七星門より進入したるに、城內路狹く、馬足進展する能はさりしに乘し、日本軍は險に據りて鳥銃を以て之を狹擊した。明軍狼狽爲すこころを知らす、史儒は丸に中りて斃れ、承訓は身を以て免れ、士卒多く泥潦中に陷り、日本兵に斬殺せられた。此戰鬪は日本軍と明軍さ最初の

手合せてある、祖承訓の兵は三千てあつたさいふ書物もあるか、要するに渠れは餘程日本軍を輕視して居つたのてある。懲毖錄の記事によれは右の通りてあるか、海東繹史には兩朝平壤錄の記事を引て、祖承訓は兵三千を率ひて鴨綠江を渡りしか、其兵は皆遼東の馬軍てあつて地利を暗せす、日本軍に對抗するの法を知らす、殊に連日大雨にて馬蹄は盡く爛裂して居つた。七月十五日に安定館(順安)に到りし際、日本兵至り遂に潰亂した、日本兵は多く馬に鬼頭獅面を載せたる故、明馬は之を見て驚擾し、淖中に陷りて起つを得す、日本兵は劒を以て之を斬つた、三千人中逃れ歸る者僅に數十人のみとある。吉野覺書には夜風雨晦暝なるに乘し、祖承訓は竊に城牆に附して居つて、天明に

俄に喊聲を發して城を攻めた、城兵大に驚き松浦鎭信の如きは甲を擐るに暇なく親ら奮鬪し、箭に脛を貫かれしも屈せす、諸將又苦戰して敵を敗つたとある。朝鮮征伐記には此戰鬪を更に大戰の如くに書いてある。卽ち五月十七日に祖承訓か安定館に來りしを知り、行長は大に喜ひ、屈强なる騎兵百餘を率ひ偵察したるに敵は案外小勢なりしも、大明軍の手並を見んとて直に之を襲擊したるに、敵軍擾亂して少しも手答へなかりしか故に、行長は大明軍も亦與し易しとし、明日を待ちて決戰せんとした。行長は一旦本陣に引返へしたるか、天明と共に二萬餘騎を引率して安定館へ押寄せたるに、明軍馬を竝へて矢を射ること雨の如く、我軍の一部は馬を下りて徒步となり、弓、鐵砲を打かけ

行長は馬を陣頭に立て、騎兵を以て中央に突擊したるに、各兵皆一騎每に指物を差し、馬にも金銀の馬面鎧を懸けたれは、明兵の馬共見馴れぬ氣色に驚きて恐れ狂ひ、鼻息吹いて取つて戻しけれは、止むを得す彼等も馬を下りて防き戰ひしか、霖雨の後なれは泥滑かにして腰迄も至り、駈引自由を失ひ、泥の中にまろひ倒れけれは小西勢は、三千餘騎を眞中に押取り籠め、散散討ちなしけれは、史遊擊を初め殆んど全滅し、行長は自ら祖承訓と組んで討たんとしたれども、彼良馬に鞭ち圍を脫して逃れ去れり、三千餘騎の內生きて歸りし者只十四人、之も半死半生に切りなされ、片息になりて、遼東に歸つたとある。西崖集、日月錄には十九日祖承訓は順安より三更軍を發し進んで平壤に

迫る、適々大雨なりしか雨に乘して七星門を攻めた、賊城内より突出して鳥銃を亂發し、史儒先登して戰死し、張世忠、馬世隆等皆戰死し、承訓は僅に身を以て免れたるも、賊の追擊を恐れ一夜に二百里を馳せて逃れたさある。寄齊雜記に承訓は十七日平壤城下に到りしに、城閉されす又兵も居らさるにより普通門より進入して大同館の前に到りしも一兵の應戰するものなく大軍長驅して進みしに、賊は左右の房屋より壁に穴を穿ちて一時に發砲した、聲天地に震ひ、史儒は丸に中りて、死し承訓馬に策て先つ遁れ、大軍潰亂したさある。

安定館は順安の客舍の名稱なりしか故に、順安を指したるは明かなるか、此戰鬪は前記の如く其地點及ひ日附か書物によりて

事實は同一なるも、戰鬪の場所か順安と、平壤城外と、七星門內と甚たしき差異かある。祖承訓か大敗し、殆んと全滅したる事實は同一なるも、戰鬪の場所か順安と、平壤城外と、七星門內と

大同館卽ち今の第一公立普通學校の邊との差異かあり、日附には七月十五日と十七日と十九日の差異かある。故に更に此問題は歷史專門家の考證に待ねはならぬか、大小數十回の戰に臨み、最も軍略に長した行長か、城門を守らすして敵兵を城中に入らしめたるか如きは、萬々有る可らさることてある。卽ち行長は始め少數の斥候を放ちて順安に敵狀を探らしめ、更に敵を平壤城外に引附て殲滅したのてあらうと思はる。地形上より察するに行長は敵か七星門に迫りし時、箕子陵及ひ牡丹臺の方面横合より突擊し、一部は七星門より義州街道を突出し、敵を箕子陵

北方の谷地及び今の元山新街道と新義州街道分岐點以北の邊に急擊し、泥潦中に陷らしめて殲滅したのであらうと思はる、舊暦七月頃は朝鮮の雨期にして、今日に於ても此附近は濕地多く新道改築前には步行困難てあつた。而して勿論敵の一部は普通江岸の方向にも遁れ、其附近の泥濘中にも陷つたものと思はるゝのてある。

六　後方との連絡

……後方連絡線の妨害……黑田長政の剛勇……長政溺死せんとす……鮮兵遠くより平壤を圍む……三路進擊の失敗……

京城より平壤に至る五十餘里、日本軍は此間處々の要害に守備

隊を置き、連絡を保持するに努めたりと雖も、此交通路は單に一線に過ぎざるが故に、側面より敵に脅迫せらるゝこと尠から す、殊に黃海道方面には鮮將朴弘長あり、後方の連絡を絕ちて行長を孤立せしめんとした。

六月二十三日應星峽にて眞鍋眞成等と激戰して大敗したるも、其後松濤城に迫りて之を拔き、守將戶田吉繁等を殺し、勢に乘して李時言等と兵を合せ、白川の黑田長政と相對峙した。六月三十日の夜長政は兵八千を率ひて之を擊ち大に之を破つた。長政は當時二十五歲の壯年にて、每に勇敢なる戰鬪を爲し、日本武士の面目を發揮したる大將なるか、征伐記等によれは此戰鬪にても面白き事實がある。卽ち此日長政は衆に先んじて進み、

敵の大將李時言を組みて討たんと志し、大勢の眞中に駈入り、多くの敵騎を斬つて落し、六騎に負傷せしめ李時言の弟李應季なる者と池の堤にて組み討ちを始め、兩人共遂に堤の上より池中へ轉ひ落ち、水底深く沈みたるか、其際長政も短刀にて二個所程突かれしか、彼も亦短刀にて李應季の脇腹を深く突き込み之を殺したるも、引組みたるまゝ水底にて絶息した。長政の兵來りて之を救はんとしたるに、池水は血に濁り水底も見へさりしか、水の澄みたる側より日光に透し見れは、長政の甲の立物金の水牛の角、日光に輝き見へたれは、水練に長する者數名直に水底に入り長政を堤上に引き上けた。然るに長政は既に溺死せる模樣にて衆皆狼狽したるか、村上某大勢の中へ分け入り、

手は薄手たれは、大事になることなし、水に溺れ給ふ計りなれは何ごそ爲すへき樣あるへしごて、長政の死體の鎧を脱かせ裸に爲し、腹の水を踏出さは宜しかるへしと雖も、誰も踏まんごいふ人なし、村上は主を尊むも時にこそよかれ、吾れ踏み出さんごて、草鞋を脱き、長政の腹を載き、足を上けて踏みたれは、長政の目、口、耳、鼻より水の出つるここ瀧の如く、悉く踏出したるに、栗山備後は鎧を脱きて長政の足手を膚に着け暖め、臍に灸治し、藥を口へ洒き入れしに遂に蘇生したと書いてある。長政は白川に歸り十餘日にして健康舊に復し、耆南城を攻め、李時言等をして再ひ攻勢を取る能はさらしめ、行長等退却の時に至つたのてある。耆南城の地點は明かならさるも、延安に李

延穐を圍み援けすして白川に歸りしこごあり、或は延安の訛傳ならんか。

時に行長は平壤に在りて進まさりしにより巡察使李元翼、巡邊使李薲等は順安に於て兵數千名を集め、前記金應瑞、別將朴命賢は龍岡、三和、甑山、江西等西海岸諸郡の兵を集めて平壤の西に屯し、別將金秋億は水軍を率ひて大同江口を扼し、別將林仲梁は兵三千を領して中和に屯し、以て平壤を遠卷にして居つた。然るに平壤の日本兵の出てさるは其勢大に衰へたる爲めなれは、明の援兵を待つに及はす、平壤を回復せんさし、廷議命して三方面より平壤を攻擊せしめた、李元翼等は八月一日三路倶に進みしか、日本軍の前哨部隊に逆襲せられて大敗し、所謂

大同江岸の勇士も多く死傷し、舊陣地に遁れ歸つた。

七　講和問題

……講和問題の眞相……策士沈惟敬來る……講和問題は一時の方便……行長詒かる……沈惟敬の人物……七ヶ條の約束……

由來我國人は戰爭に强きも外交には甚た拙劣てある。近年吾人か見聞し、若くは經驗した事件に關しても言ふに忍ひさるものかある。文祿、慶長の昔、海外の事情に疎き時代にありては亦止むを得さるものありと雖も、市井の小人沈惟敬の爲めに籠絡せられて、勇猛無双の我戰士か百戰百勝の効果を一朝にして空しくせしめたるは、實に遺憾此上もなき次第てある。史家或は

當時行長は既に戰に厭み、且つ明軍を恐れて講和問題を機とし、速に歸還せんと欲したるか爲に、沈惟敬と計り平和を克復せんとしたるか如く論ずるものもあるか、吾人は此説に賛成するを得ない。何となれは、海を渡りて僅に五箇月、年少より戰場に驅逐したる行長か、例令異域に行動すと雖も、未た決して望郷心を起すの時期に非らさること、祖承訓との一戰に、明軍亦恐るゝに足らさるを覺知したるを以て、右の説は確かに其當を得さるものである、後に行長も行懸り上講和論者となつたか、少くとも平壤に於ける沈惟敬との談判には、斯の如き事情は全然伏在せさるへしと思はる。行長元と商家に生れたりと雖も、其行動を見るに勇氣あり、膽略あり、戰術に長し、天晴れ戰國

名將の器てある。而して相手の沈惟敬は、虚言を吐くを常事とせる支那人中にても、珍らしき狡獪者なる才子てあつた。比較的正直なる行長か、全然沈惟敬に籠絡せられたるは、亦止むを得さる次第てあつて、之を大きく言へは、兩國の國民性か然らしめたのてあるとも謂ひ得るのてある。孫子の兵法にも百戰百勝は善の善なるものに非すと曰つて居る。即ち外交を以て敵を屈服せしむるは百戰百勝にも優ることを教へたのてある、實力に乏しき支那か毎に權謀術數を弄して、現時にても往々諸外國を飜弄することあるは、敢て怪むに足らぬのてある。余は嘗て間島問題の當時間島に在りて約二ケ年間清國官憲と折衝した經驗を有するも、彼等の權謀術數は殆んと先天的てあると言ひ得

る。日支親善を說く者、今日支那には尙ほ幾多の沈惟敬あるこ
ごを注意しねはならぬ。
明史によれは祖承訓一たひ平壤に大敗し、日本兵豐德等の郡に
入りしより、明の兵部尙書石星は策の出つるところを知らす、
人を使はし日本軍の狀況を探偵し兵を紓ふせんこ決し、沈惟敬
を得て之を行長の許に使はしたるに、行長は沈惟敬を紿き、明
兵幸に動かさるより、我軍も久しからすして還らんこす、大同
江を以て界となし、平壤以西を朝鮮に屬せしめんと言ひしによ
り、沈惟敬は之を以聞したるも、廷議之を疑ひ兵を進めたとあ
る豐德郡こは何れの郡を指したるや明かならす、或は何等かの
誤傳ならんこ思はる。海東繹史には大司馬石星は沈惟敬を使は

し、倭營に宣諭し、惟敬は輙ち封貢の議を唱へ、倭を要し兵を退かしめんとしたるに、行長は只平壤より退き、大同江を以て界と爲さんと言つた、實は天寒くなるを以て、佯て明の師を緩ふせんとしたのて、平壤を退くの意思は無かつたのた、朝廷は其詐りなるを識り、一意兵を進むることにしたとある。以上の記錄によれは却て行長か明を欺きしか如くてあるか、諸書を綜合するに講和問題の起りは、初め石星等は朝鮮を救ふの議を建て、之を實行したるも救援軍は一敗地に塗れ策の出つるところを知らさりしにより、講和問題を提出して兎に角一時兵を紓ふせんとしたのてあるから、沈惟敬の如き辯士を派して行長に說かしめたのてある。卽ち明の策略は初めより行長を欺かんとし

たのであつて、行長は遂に其手段に乘せられたのである。

一說には沈惟敬は元と市井無賴の徒なりしが、嘗て日本に渡り、小西行長に逢ひ醫術を敎へ、行長は之を悅ひ、恩遇甚た厚かりしが、其後明に歸り各所を漂泊して北京に到りし時、吳の俠妓に陳澹如といふ絕世の美人あり、深く惟敬と契りしが、澹如の僕に鄭四といふものあり、先年日本に捕へられて筑紫に在りしか逃れて明に歸り能く日本の事情を談れるより、惟敬は之に聽きて詳に日本の事情を知り、機の到るを待ちしに、石星の妻は又陳澹如と親密に往來し、澹如より惟敬か能く日本の事情に通するを聞きて、之を石星に薦めしに、石星大に喜ひ、沈惟敬を遣はし和議を講せしめ、以て大軍の出征準備を爲したとある、

又一說には惟敬の父は嘗て日本に行商し、惟敬も亦父に隨て往來し、能く日本の事情を知れるにより上書して自ら進て倭に諭さんことを請ふたとある。斯して沈惟敬は石星の命を含み、朝鮮に到り八月二十九日小西行長と箕子陵の北方坎北山下に會見した、坎北山は或は乾伏山と書し、或は降福山と書した書物もある。此會見によりて小西行長は明若し講和を欲せは、速に使節を日本に使はすへしと曰ひ、尙講和條件として七ケ條の約束をなした、惟敬は一先つ歸りて之を上奏し、和議を決して來るへしと稱し、五十日間の休戰を約した、而して平壤を距る一里の地點に標木を建て、兩國の軍は互に此標木を超へさる事として去つた。征伐記には此七ケ條は第一和議、第二割地、第三

入貢、第四封號、其の他は兩人共秘密としたる故に明かならすとある。第一の和議は日、韓、支三國間の平和を克復するものて近世の講和條約の冐頭に「兩國間に永久の平和あるへし」こ書く樣なものてある、第二は大同江以南を割て日本に與へ第三の入貢こ、第四の封號か双方全く解釋を異にして居つたのてある行長は之を以て明より我國に朝貢し且つ明に王たる義と解し、明廷は諸藩王封貢の例に倣ひ、秀吉を日本國王に封するの義こ解したるか故に、後に至り大破裂を生したのてある。沈惟敬の使命は、行長との第一の會見に於ては、講和問題を以て行長を欺き、日本軍を油斷させ、自國軍の集中を便にせんとするにありしは明かなるも、後には成し得れは講和を成立せしめ、自己の

功績に歸せしめんとの野心も生したのは明かてある。
懲毖錄によれは沈惟敬は平壤に赴き、黃袱を以て書を包み、家僕一人をして普通門より入りて、行長に其書を呈せしめ會見を求めたるに、行長は直に之を承諾し會見を許した。惟敬は從者三四人を從へ日本軍に赴きしに、行長、義智、玄蘇等は盛に兵威を示し、出て、城北十里(我一里なり)外の降福山の下にて會見した。(今の坎北)我軍は大興山に登つて之を望見したるに、倭兵甚た多く、劒戟雪の如き內に、惟敬は馬より下り、倭の陣中に入りしに、群倭四面より圍繞し、拘執せられたるに非すやと疑はれたか、暮方に至り彼は出て還り、倭衆之を送る甚た恭しかつたとある。燃藜室記述には此會見には惟敬は此地方は天朝

の地方なるか故に、此地方を退き以て天朝の命を待つへしと諭したるに、行長は朝鮮の地圖を示して之れ明かに朝鮮の地方てあると言つた。惟敬は然りと雖も當時朝鮮は天朝の詔書を此地に迎ふるか故に、平壤には許多の宮室もあるのてある、朝鮮の地と雖も乃ち上國の界てあると謂つたか、行長は請ふて惟敬より何分の報知あるを待つことゝしたとある。

沈惟敬は詭辯を以て行長を平壤より撤退せしめんとしたるも、行長は之に應せさりしにより止む無く歸つて之を復命し、倭は封貢を求むるも然らされは退意更に無しと報告した、石星は惟敬の說に動かされ、後に至るまて講和論者てあつたか、此時既に一面に於て、明は兵部右待郞宋應昌を以て經略使と爲し、出

師準備の最中なりしか故に、眞に講和問題を顧慮するものは無かつた。宋應昌か遼陽に來りし時、沈惟敬か彼に謁見したるに、彼は倭封貢を求めは、たゝ辭を卑ふして朝廷に來るへし、朝鮮を破り我に强要するは不可なり、我既に命を奉して倭を討す唯戰あるのみ、汝往て倭に會見する際必す封貢を求めは、宜しく盡く朝鮮を還附し、全軍釜山に退き命を聽き、臣と稱して表を具すへし、今只平壤を撤退することを云爲するは、兵を緩ふするの計なり、今は戰あるのみと稱し、氣焰當るへからさるものがあつた。行長は平壤に在りて沈惟敬の消息を待つたか約束の五十日を過くるとも何等の報知無かりしか故に、茲に疑を生し、近日將に馬に鴨綠江に飮んとすると聲言し、大に兵器を修めた

るに鮮人は益々懼れ、明軍の進發を促したのである。然るに沈惟敬は十一月六日に至り、再ひ平壤に來つて行長を詣き、和好の成る近きにあるを告け、現狀維持を約して去つた。此時彼は帽子數萬個を持來りて日本兵に贈り、其兵數を探りて歸つたといふ說もある。

行長と惟敬との交涉は大要以上の如くであるが、碧蹄館大敗の後は、石星は勿論宋應昌等も衷心講和問題を考慮するに至り行長始め日本の諸將中にも其意見に傾くものを生し、遂に明より正使を日本に送ることゝなつたのは人の知るところである。

八　明の大軍の來襲

……間諜捕へらる……敵の來襲を知らす……李如松行長を欺く……日本軍の兵力と明軍の兵力……

小西行長は文祿元年六月十三日平壤を占領せし以來、祖承訓等を撃退したる外、大なる變動もなく、沈惟敬と休戰を約し、講和の消息を俟つこと久しきに彌り、糧食も漸く乏しく、疫癘も流行して城兵は坐ながら困められた。然れども毎に間諜を放ち敵の動靜を探りしか、十二月初旬に於て間諜の一人金順良なる者安州にて捕へられ、間諜を爲す者四十餘名、毎に順安、江西、肅川、義州等の地帶に隱密に行動せることを自白した、之か爲めに間諜等は或は捕へられ、或は逃亡して、行長は全く敵狀を

知ることを得さるに至り、明軍の先頭既に順安に來るも、之を講和使なりと信して居つたのである。
明の經略史宋應昌は遼東に止まりて指揮し、李如松を提督とし、勇將六十餘人、南北の官兵四萬三千餘人を發して朝鮮に向はしめた、十二月二十三日李如松は義州にて朝鮮王に會し、文祿二年正月元日安州に到着した。柳成龍は之を迎へて朝鮮の地圖を示し、地形を指示し、李如松は一々之を傾聽して自ら朱筆を以て圖上に誌し、且つ日本兵は鳥銃を賴みとするも、我は大砲を用ゆるを以て勝算疑無しと言ひ、同夜祝杯を擧け詩を作りて前途を祝した。正月四日李如松肅川に至り、別將査大受をして先つ順安に往き、天朝已に和を許し、封使沈惟敬をして來らしめ

たことを告げ、行長を詒かしめた。行長は之を信し、將士二十人を順安に使はし之を迎へしめたるに、査大受は酒を飮ましめ、伏を設けて之を生擒せんとした。日本兵は格鬪したるも、三人は捕へられ其餘は遁れ歸つた、(亂中雜錄其他には三人逃れ歸つたとある)行長は大に駭きしか、尙ほ明軍の事情を知らす、小西飛を使はして之を詰問せしめたるに、李如松は之を慰め歸した。小西飛とは內藤如安の異名にして、如安は丹波の人、行長に仕へ文學を以て聞へ、開戰前にも朝鮮に使し、此後講和問題の時にも、日本の節使として明に使したる人なるか、行長の姓を貰ひ飛彈守と稱したる故に明人之を小西飛と呼んだのである。

正月六日明兵旣に平壤に迫りしか、明史によれは行長は猶封使

の來るものと信し、風月樓に佇んて之を待ち、將士をして正裝して之を城外に迎へしめた。如松は諸軍を分布して城下に抵りし時形勢露れ、日本軍は悉く城牌に登りて拒守したとある。我征韓偉略にも此說を採つてあるか、恐くは事實てあつたと思はる此時行長の兵力は何程てあつたかは明確に知り難きも、前に述へたる如く、出征の際は宋義智其他の兵を合せ、行長の指揮下にある者一萬八千七百人あつた。此內には水夫とか雜役夫もありしなるへく、前述の如く「普請半分」の連中もありしなるへく、其後釜山より平壤に到る間、大小數十回の戰鬪に死傷者も相當にありしなるへく、平壤在留中にも疫癘にも困しめられ、鳳山との連絡の爲めにも二個所に砦を置きし故に、餘程減少して居

つたと思はる。燃藜室記述には「初賊入平壤。兵約六七千。招諭亂民作兵守城」とあり、海東繹史には我和漢三才圖會を引て「城兵不充五千」とあり、征韓偉略には征伐記、秀吉譜等を引用して城兵一萬五千人とある。尙ほ京城に退却した後に、京城に於ける日本軍の數を調査したる內に、小西行長の兵數六千六百二十六人とあり、平壤に於ける戰死者の數等を綜合して考ふれは平壤籠城の日本兵は約八千人とするを正當と思はる。而して明軍は前記四萬三千餘人の外に朝鮮兵を加へて二十萬と號したとあるも其實は六萬位なりしならん。行長は斯る少數の兵力を以て急に大軍の攻擊に遇ひたれは、直に一方鳳山に在りし大友義統に來援を求めた。然るに大友は來援せさるのみならす、

狽狽して京城に退却してしまつた。後に大友は之れか爲めに太閤より處罰せられ、舊家たるの故を以て死は免れしか其封を削られた。

九　平壤の大激戰

……日本軍の配備……行長牡丹臺に陣す……行長の夜襲……物凄き光景……休戰の交渉……明軍の大攻擊開始……日本軍毒瓦斯に苦めらる……朝鮮征伐記の記事……含毬門敗る……小西主殿助の戰死……平壤續志の記事……七星門、普通門亦敗る……日本軍の損害……當年の平壤……

日本軍の配置は、一隊を牡丹臺一帶の高地に置き、豫め柵を設け、塹壕を掘り、掩蓋を作り、銃眼を切りて防禦工事を施して

置いた。現在の浮碧樓より牡丹臺を圍繞せる城壁は牡丹臺を敵に占領せらるれは、内城を俯瞰せらるゝの危險あるを以て、崇禎後甲午の歳卽ち文祿役より九十二年目に、觀察使閔鎭遠か築造したのてある。故に此當時は未た牡丹臺には城壁はなかつたのてある。而して城内に於ては首力を七星門より普通門方面に置き、尙ほ少數の一隊を以て含毬門方面を守らしめ、又一隊は螺を吹き鼓を鳴らして城中を巡視して居つた。其他最後の防禦營造物として今の關帝廟の後方高地及ひ萬壽臺一帶に掩蓋を有する塹壕を設け、更に練光亭、大同門附近より今の鐘路を經て、章臺峴(舊名將臺峴)の高地に亘り曲窟を設けた。當時の記錄に火箭か土窟に中りて火災を起さしめ、或は土人の家屋を毀ちて

土窟を作り、或は土窟を遠方より望めは蜂窩の如しなとの記事あるを見れは、何れも掩蓋を有する塹壕を堀り、之れに多數の銃眼を造つたことは明かてある。
明軍は正月六日義州街道より押寄せ、吳惟忠等の一隊を以て先つ牡丹臺を攻擊した。時に行長親ら牡丹臺にありて指揮し、銃を發して防戰最も努め遂に之を擊退した。宋義智は城中にありしか、牡丹臺孤立して城中との連絡を絕たれんことを恐れ、國分隼人を使はし、行長を勸めて城中に入らしめた、明兵も亦退て牡丹臺下に陣した。此夜行長は明軍晝間の戰鬪にて疲勞せるを知り、一隊の兵を提け、明將楊元、李如松、張世爵の營に夜襲を試み、奮鬪數刻に及ひしか、明軍善く戰ひしかは、多大の

損害を蒙り退却の止むなきに至つた。尙ほ此日鮮將鄭義賢、金應瑞等は含毬門外に陣したるに、宋義智は潛かに大同門を出て、大同江岸に沿ひ、迂回して、背後より之を襲擊したるに、鮮軍大敗し死するもの十に七八もあつた。(平壤續志)六日の戰鬪は以上の如く部分的であつて未た決戰的てはなかつたのである。七日に至り明の大軍は既に城下に押寄せ、野となく山となく、明兵一面に充滿して、寒さは嚴しく物凄き光景を呈して居つた。行長は現に講和問題の進行中にあれは、人質を交換して此戰鬪を避くるに如かすと考へ、通辭福景徵を使はし、日本干戈を動かし、朝鮮に入るに只入貢と封號との故なり、今沈惟敬により明の勅命を待ちつゝあるに、不意に攻擊を蒙りたるを以て、止

む無く防拒の手段を講するも、願くは質を交換して此戰を止め、勅命を待たんと申込ましめたるに、李如松は僞りて之を諾したれは、行長は人質として竹内吉兵衛を遣はしたるに、明軍よりは遂に人質を送らなかつた。此問題の爲めに七日は自然休戰の狀態にありて戰鬪は無かりしか、只此夜行長は再ひ李如柏の營を斫り、夜襲を試みて敵陣を攪亂せしめた。

翌八日早朝李如松は令を三軍に傳へて齊しく攻擊を開始し、七星門、普通門、含毬門の三方面より迫り、親ら親兵二百餘騎を領し、各所に往來し指揮をなした。明軍は虎蹲砲を用ひ城廓を砲擊し、毒矢、火箭等を發して城兵を苦しめた。虎蹲砲は現今の攻城砲の如きものなるへきも其製を詳にせす、此砲は此戰役

後三十餘年を經て、滿州軍か朝鮮王を南漢山城に圍み、之を降伏せしめた時にも盛に用ゐられて居る。毒矢は火箭の一種なるへく盛に毒瓦斯を放散した。火箭も亦盛に各處に火災を起さしめ日本軍は大に此毒瓦斯と火箭に苦められた。現に普通門の樓上に掲けてある扁額にも、當時の戰況と火箭により附近一帶盡く火災に罹つたことを書いてある。日本軍の武器は小銃こ刀槍のみてあつて、野戰にては毎に先つ小銃を發し、敵の動搖するに乘して、大刀長槍を振つて斫り卷くるを得意とせしか、籠城戰に於て右の如き攻城用具を以て攻擊せられては、尠からす辟易した樣てある。此日の戰況に關し朝鮮征伐記には左の如く記載してある。

明くれは八日の早天に、大明三脇の兵二十萬騎、一度に城へ乘り込まんと、三方より鬨を揚けて押寄せたり、互に放ち懸くる石火矢は、千雷の鳴り落ちしか如し、喚き叫ふ音は、山も谷も傾くへしこそ覺えける。小西怒つて涙を流し、大明人に出し拔かれ、人質を出しなから、斯くの如く攻めらるゝこと、吾人はいふに足らす、日本の越度たり、此上は是非に及はす、死狂にせよとて兵共櫓の上矢間の内より、大筒小筒を集めて雨の降る如く打ち出しけれは、寄手二千許り塀下、堀涯に打倒され、大軍も引色に見えたりける。小西か兵之を見て、得たり賢こしと、三方の木戸を開き拔きつれて打つて出てたり。烟塵天を掠め、汗血地に溢れ、引き組んで首を取るも

あり、射合せ打ち合せ、太刀討の働き、先登を名乗る聲々山を拔く計りなり。
數刻攻め戰に、討ちつ討たれつ揉み合ふ間、城中西方の勢共、大手三の木戸へ擧り集れは、城の西の方防く兵なかりけるを見て、張世爵、吳惟忠等、右脇の南兵一萬餘騎、力を合せ一度に乘り込み、矢倉に火を懸けて凱を揚く、此口は行長の弟小西主殿助固めたりしか、大敵に急に乘り込まれ、此手防くにも及はす亂れけれは、主殿助血眼になつて、こは口惜しき次第かな、身命を捨てゝも、此所は破られじと、大音あけて訇りつゝ、鯖尾出したる黑母衣をゆすり、懸穗長の鑓を提け、自身突いて出て、鑓を合せ防き戰ふ有樣喩へていはん方なし。

主殿助か兵混甲五十餘人、主の左右に立ち重なり、汗水に成り、防き戰ふこと二時計りなり。然れとも寄手は猛勢なり、新手を入れ替へ〳〵攻め懸る。主殿か弓手、妻手に相從ふ兵共、或は手負ひ、又は討たれ算を亂したるか如く、殘り少なになりけれは、主殿助聲も涸れ息切れ、深手六七箇所負ひけれは、心計りは矢竹に逸りけれとも、今は世の中搔き暮れけれは、味方の死骸の上に腰を掛け、餓鬼め、蓬し返せや〳〵と逃くる味方を訇しけれとも、助けんとする兵もなし。然る所へ行長か茶童幽閑と言ふ坊主來りて、早や御除きなされよ。御手柄にて御座候と言ふ。主殿眼を瞋らし己れか分別には似合ひたるそ。此手巾を母の方へ、之れは妻に渡せとて、內甲

の鬢の髮を押し切つて、二色の筺を茶童に渡し、鐙提け又突いて出て、二三人突き倒しける所に、漢南の茫虎と言ふ者突懸り散々に戰つて、主殿を突伏せしかは、主殿も伏しながら刀を拔き、茫虎を薙伏にとはしたれども、數箇度の戰に疲れ、深手は數箇所負ひたり。念佛高聲に唱へて、生年二十八歲にて、終に首を取られけり。無慘といふも愚かなり。三方の寄手氣を得て、同時に攻め上り、塀柵を引破り、幾重ともなく彌か上に攻め入りける。痛はしや小西は、籠鳥の思を焦し、萬死一生の身となりぬ、大明勢厚くして屛風を立てたる如し、十重二十重に押し來りしを、小西か兵、弓、鐵砲を調へつゝ、浮矢な射そ、さても遁れさる所なり、心を一にして、此城を

枕にせよと互に勵み防き戰ふ、一人にして五人十人こそ切りも突きもせんすれ、何程討たるゝをも顧みす、岩を立て押懸く樣に戰ひ來る。

其の上西の木戸口にて、小西主殿討死せしかは、南兵雲霞の如く、塀をも柵をも踏み來り、乘り入りしかは、小西も外郭を持つへき樣なくして、皆本城牡丹臺へ窄みけり。寄手は城を乘取つて悅ひ勇むこと夥し。今朝卯の刻より午の刻の下り迄戰ひ、味方討たるゝ者小西主殿を始め一千六百餘人なり。大明勢も數を知らす討たる、と雖も、猛勢なれは物ともせす。小西は本城を取られしと、矢間配し、鐵砲頻に打ち出せは、群り集る大明勢、浮矢一つもなく、片時の間に討たるゝ者數

千人なり。日漸く西山に傾けは、提督も行長か勇力容易く摧き難し、今日は本城を乗り取ることなるまし、明日こそ寄せめとて、手負を助けて各々本陣へそ歸りける。今日南兵力を合せて堅城を攻め取り、小西主殿已下數多討取り祖承訓か恥を雪き、史遊擊か仇を報ひたりと勝鬨を上けて悦ふ。去れとも寄手も石に當り、壓に打たれ、矢鐵砲に中りたり、石垣より落ちて死する者五千七百餘人とそ聞えける。

又平壤續志には左の如き記事かある。朝鮮の書籍は此記事と大同小異てある。

八日黎明李如松は鑼を鳴らすこと一聲、三軍を統て攻擊を開始し、一軍は七星門を攻め、一軍は普通門を攻め、一軍は含

毬門を攻め親兵二百餘騎を率ひて往來指揮をなした。將士踊躍大砲の一齊射擊をなし、聲天地に震ひ、火箭は城中に入りて林木皆焚けた、賊城上より長槍大刀を以て齊しく下に垂れ森として蝟毛の如く、鉛丸矢石亂落して雨の如くてあつた。如松は手つから退者一人を斬つて陣中に示し、先登者には銀五十兩を賞せんと呼んだ、駱尙志は身を聳して先登し、吳惟忠と共に蟻附して城に登り、諸軍鼓噪して之れに從ひ、麻牌を負ひ矛戟を持し鱗次に齊しく進んだ、賊支ふる能はす內城に退いた。駱尙志は城門を打破して勝に乘して城內に亂入した、時に如松は五車峴の東部に陣し賊窟を壓した、城中火起り、死者城に盈ち、賊勢窮縮して走つて土窟に入つた。土窟の上に多く孔穴を穿ち、之を望めは蜂巣の如く、穴の中より

銃丸を亂發し、天兵亦斃るゝ者多かつた、如松窮寇死を致すを慮り軍を收めて營に還つた。」云々

征伐記の行長か牡丹臺に退きしとの記事は、征伐記の筆者か地理に暗く牡丹臺を內城と信したる故に、無雜作に牡丹臺に退きし如く記載したものと思はる。牡丹臺は六日に撤退したるのみならす、八日夜半潛かに大同江を渡りて退却したる事情を考ふるも行長の退きし內城は牡丹臺にあらさるは明かてある。國朝寶鑑其他に行長入つて練光亭土窟に據る、或は餘賊躲けて風月樓の小城に入る等の記事かあり、風月樓は其地點明確ならされとも、前記の如く元愛蓮堂のありし風月池の附近とすれは、愛蓮堂は今の朝鮮銀行附近なれは、大同門、練光亭の內側に塹壕

を以て防備を施したる地點ありしは明かてある。平壤續志に「盡發廨砌。大作曲窟於練光亭北。南環大同門。西至風月樓。」との記事もある。又前記の如く行長は明軍の來るを講和使の來るものと信し、風月樓に在つて待つたとあれは、風月樓は行長の本陣なりしならんと思はる。又明軍外城を破りて後、李如松か賊軍を壓したと稱する、五車峴は今の靜海門外の牛市場の所在地てある。卽ち如松は普通門を入り今の靜海門の北の高地に登りて內城を望見したのてある。又前記小西主殿の敗れたる南門は、明史によれは日本軍は常に鮮兵を輕視するか故に、祖承訓の一隊をして、鮮人の服裝をなさしめ西南に向はしめたるに、日本軍は果して之を輕視し主力を普通門七星門方面に集中せるに乘

し、一齊に鮮裝を解き、明甲を露はし攻擊を開始した、日本軍は大に驚き急に兵を分つて押拒したとある。卽ち此南門ご稱するは含毬門にして、今の郵便局附近旭町ご瑞氣通の交叉點あたりにあつた。右の如く南門の防拒も破れ、西北面も苦戰中兵力を割きしか故に、遂に普通門も守を失つたのてある。

普通門の戰闘は最も激しかりしか如きも記錄の徵すへきもの尠く甚た遺憾てある、數年前該門修繕の際、楹桂に深く穿入せる數多の箭鏃を發見し、之を拔き出して扁額ごし、現に同門樓上に保存してある、此等は當年の激戰を語る好箇の記念物てある。

平安道巡察使李元翼か此戰況を國王に報告せる啓狀によれは、

日本軍を斬獲したる首級一千二百八十五顆、生擒の倭賊二名、奪獲せる馬二千九百八十五匹、救ひ出せし本國の被擄男女十一百十五口とあり。生擒者の僅に二名なるは、降伏者の尠きを示すものにして、日本人は古へより戰鬪に負けて敵に降らさることを證明するものてある。

要するに此戰鬪は、明軍は攻城砲及ひ毒瓦斯、火箭等を使用し、衆を賴んて平壤の北、西、南の三面より攻圍し、日本軍は小銃、弓矢、刀槍を以て最も勇猛に防禦したるも、兵器の相異と衆寡敵せさるとにより、先つ含毬門より破れ、次て普通門を破られ、兩軍共に多數の死傷者を生して、遂に外城を奪取せらるゝに至り、退て內城を保つたのてある。近時內城と稱するは乙密臺、

七星門より慶昌門に沿ふて（慶昌門は今の高等普通學校の下にありしか今の城外道路開築の際取除けたり）靜海門に至り、現存せる石疊を傳ふて、南門通に出て警察署の前通りを江岸に至り、更に大同江に沿ふて大同門、練光亭を經て乙密臺に至る城壁を以て圍繞せられて居つた。今の警察署の右側に十年前まで南門と稱したる朱雀門あり、夫れより城壁を以て江岸より乙密臺に連りしか、近年皆除去せられて現形となつたのである。外城は右の慶昌門より起り、普通門を經、現在の土壘に沿ふて共同墓地のある案山の高地を包み、東折して兵營前より瑞氣通りに出て、江岸に達し更に江岸に沿ふて陸路門（警察署前通の江岸にありしか今は無し）に於て、內城に連絡して居つたのである

る。然し文祿役の平壤城は卽ち右の城外までを指したるものにて、此內城は天啓四年(寬永元年)に至り、卽ち壬辰の役より三十四年を經て外城が大に失し守り難きを以て、城を縮めて造りしものにして、行長の退いた內城とは別問題である。行長の退いた內城と稱するは、前記の如く各所に造つた土窟、或は曲窟、卽ち近世の所謂塹壕及び掩蓋を設けて防禦したる地域を指すものである。

十　行長の平壤撤退

……李如松薄暮兵を收む……大友の援軍遂に來らす……開城會議夜半大同江を渡りて退く……長政大に行長を慰藉す……感慨無量……

李如松は既に外城を占領せしも、日既に暮れ、味方の損害も亦夥しく、日本軍必死の勢にて夜襲するやも計られされは、明日を期して內城を攻擊することゝし、一先つ軍を收めて各々其營所に還つた。行長は此日高樓に登りて見渡したるに、敵の軍勢は甚た多く、味方は此日の激戰に多くの損害を蒙りたるのみならす、大友の援兵は待てども來らす、斥候の報告にも、遠方を見渡すも援兵一人も來る模樣なしとあり、非常の苦境に陷つた。

是に於て諸將を行長の營に會し、軍議を開いて、其意見を徵したるに、有馬調信は明朝敵必す來襲すへきにより、內城は狹隘にして防禦に便ならされは、速に外郭を修理して之を固守せは或は援兵の來るあらんと曰ひ、松浦鎭信は援兵の來らさるは、恐くは明軍旣に要路を扼塞したるならん、今死守せんとするも、兵士は多く毒火の爲めに薰殺され、爨炊を爲すものすら乏しきに至れり、大同江結氷して渡るに易きを以て、一たび退却して諸將の兵を合し再ひ平壤を取らんと曰ひ、行長、義智は公の計略も其宜を得たるものなる故に、速に退いて再擧を謀るへし、我等は茲に死戰して其志を遂けんと曰ひ、大村嘉前、五島純玄は行長と共に死せんと曰ひ、軍監小野木某は我兵旣に疲弊して

用ゆへからす、且つ衆寡懸絶するを以て、徒に死するは益なし、鎭信の意見に從ひ一旦退却し、軍を合せて善後策を講せんと曰ひ、諸將遂に其議に從ひ、各兵を纒めて夜半大同江の氷上を渡り退却したのてある。日月錄等には李如松は行長に告け、生路を開き退却せしめたごあるも信を措くに足らぬ。西崖集には行長等餘衆を率ひて連夜遁還し、氣乏しく足繭り、跛躃して行き、或は田圃の間を匍匐し、口を指して食を乞ふの狀況てあつたか、我兵一人の出擊つ者無く　黃海道防禦使李時言は其後に追尾して、飢病の落後者六十餘人を斬つたとある。言辭形容に過くるものあるへきも、舊曆一月八日の眞夜中にて、平壤の寒氣最も激しき頃にて、糧食も充分ならす、中に傷病者も混したるへく、

蓋し此退却は最も悲慘を極めたのてあつたと思はる。

翌九日明軍平壤に入りしも、日本軍は遠く去て跡なく、日本軍は飢を忍ひ、寒氣に凍へつゝ、同日夕刻鳳山に到着したるに、大友の兵は既に退却後にて、如何ともし難く其陣所に火を放ち、更に疲勞困憊を忍ひて、長政の臣小河某の守備せる龍泉に到りしに、小河は能く之を慰勞し、此城險にして糧食銃丸又充分なれは、敵追擊し來るとも恐るゝに足らす、安心して充分に休息すへしと、粥を作り上下の飢寒を救つた。小河は直に之を長政に報告したるに、長政は迎へて白川城に入れ、上下の衣服を給し、數日間之を饗して休息せしめた。小西勢は始めて蘇生の思ひを爲し、深く長政に感謝した、小西は長政を促して共に京城

に退却せんとしたるに、長政は肯せす公は旣に苦戰して士卒傷夷せる故速に去るへし、予は此地に止り明軍の到るを俟て勝敗を決せんとて、先つ小西を却かしめた。然るに京城の總司令部は諸軍を京城に集め、力を合せ明軍に當らんとし、長政等にも撤退を命したのである。

あゝ行長は釜山上陸以來、破竹の勢を以て到る處其敵を擊破し、僅かに二ケ月にして、平壤に到り鴨綠江を超ゆる亦正に旬日を出てさりしも、總司令部の制肘と明人の欺罔とにより、半ケ年間空しく平壤に滯在し、坐して大敵の急襲を蒙り、此戰後の効果を殆んと空しくしたるは甚た遺憾である。若し長政をして鳳山に在らしめは、淸正の蔚山を救ひたる如く、必す平壤を救援す

へく、多少の苦戰は免れさるも、恐くは明兵を平壤に擊破したるならんと思はる。明兵は武器の優秀こ、兵力の多數とにより平壤に捷ちしこ雖も、其後の戰鬪に於ては殆んと日本軍の敵に非す、封貢の意義につき其後復た沈惟敬等に籠絡せられさりしならは、碧蹄館大捷の後、忽ちにして平壤を回復し、進んて明兵を鴨綠江以北に驅逐するは易々たるのみなりしに、外交の術に長せす、忠勇無双の勇士をして、空しく異域の鬼こ化せしめしは、實に千載の遺憾てある。

あゝ文祿の役には平壤を捨てゝ九仞の功を一簣に缺き、日清の役には平壤を獲て東亞の大局を定む、秋高く天淸きの時一たひ

杖を牡丹臺に曳て、古今の成敗を達觀すれは、豈に感慨無量ならさるを得んやてある。（完）

牡丹台ヨリ小西行長ノ渡渉點ヲ望ム



附 録

平壤地方の歴史

本篇は大正五年八月靜岡縣教育視察團に對し極めて簡單に平壤地方の變遷を講話する爲め準備したる草稿を視察時間の都合上其儘謄寫して配布したることありしか今回該草稿の年代其他に一二の補正を加へ附錄として掲載するものなり

大正八年一月

著　者　識

平壤地方ノ歴史

朝鮮史家ノ曰フトコロニヨレハ、唐堯戊辰ノ歳（今ヨリ四千二百有餘年前ニ）神人アリ天カラ太白山（今ノ妙香山）ノ檀木ノ下ニ降ツタ、當時此地方ニ君長無カリシ故ニ、國人之ヲ立テヽ君ト爲シ、號シテ檀君ト云ヒ、國號ヲ朝鮮ト稱シ、平壤ニ都ヲ定メタノテアル。其後檀君及其子孫ノ事跡ハ不明テアル、故ニ檀君ノ天降リモ、荒誕無稽ノ説テアルトイフ者モアル、然レトモ朝鮮史家ハ何カ據ルトコロアツテ書イタモノカモ知レヌ、果シテ然ラハ兎ニ角四千餘年前ニ、朝鮮ト稱シタル國ハ此地方ニシ

テ、其都ハ平壤テアツタノテアル。檀君ノ天降リショリ千二百十餘年ヲ經テ、支那周武王ハ箕子ヲ朝鮮ニ封シタ、箕子ハ人モ知ル如ク殷ノ太師ニシテ、微子ヤ比干ト共ニ暴君紂王ヲ諫メタレトモ聽カレス、紂ハ微子ヲ追ヒ、比干ヲ殺シ、箕子ヲ囚へ、淫虐益々甚タシカリシ故ニ、箕子ハ佯狂シテ奴トナリ、殷ノ樂器祭器ヲ持ツテ周ニ走ツタ、周武王ハ紂ヲ亡ホシ箕子ヲ朝鮮ニ封シタ、箕子ハ其徒數千人ヲ率ヒテ朝鮮ニ來リ、平壤ニ都ヲ定メ、民ニ禮樂田蠶ヲ敎へ、又八條ノ敎ヲ制シタ、(後漢書東國史略)然シ宋史ナトニハ箕子ノ來タ朝鮮ハ今ノ遼陽テアルト謂テ居ル、然シ何レニシテモ西鮮地方ハ箕子ノ封セラレタ領地テア

ツタコトヽ思ハル。箕氏ノ時代ハ約九百三十年程繼續シテ、四十一世ノ箕準ノ代ニ至リ、燕人衞滿ノ爲ニ追ハレテ國亡ヒタノテアル。當時衞滿ハ今ノ滿州ノ蓋平ニ居タ者テアル、衞滿モ箕氏ノ故城卽チ平壤ニ居リシカ、八十七年ヲ經テ其孫右渠ニ至リ漢武帝ニ滅サレタ、此歲ハ今ヨリ二千〇二十八年前テアル。漢ノ武帝ハ其地方ヲ分チテ、眞番、臨屯、玄菟、樂浪ノ四郡ヲ置テ之ヲ治メタ。眞番郡ハ今ノ滿州盛京省地方ニ當リ、臨屯郡ハ朝鮮江原道地方、玄菟郡ハ咸鏡道地方、樂浪郡ハ平安道黃海道地方テアツタ。卽チ右ノ樂浪郡カ西朝鮮ニ置カレタノテアツテ、從來其郡治ノ在リシ場所ハ平壤ト想像セラレテ居リシカ、數年

前其遺跡カ大同江ノ對岸鐵橋ノ下流二十町ハカリノ地點ニ發見セラレタ。其遺跡ニハ今テモ漢瓦カ一面ニ散在シテ居ル、此等ノ漢瓦ニハ「浪樂禮官」及ヒ「大晉元康」或ハ「官」等ノ文字ノアルモノモアリ、「樂浪太守章」ノ文字アル泥封モ出テ、尙ホ漢時代ニ用ヒタ銅鏃ヤ土器ナトカ出ル。又其ノ附近ニ小山ノ樣ナ數百ノ古墳カアル、土人ハ之ヲ都塚(テムドム)ト稱シ、煉瓦ヲ以テ內部ヲ「アーチ」形ニ積ンタ支那古代ノ樣式ノモノテアル。尙ホ古墳ヲ發掘シテ研究ノ結果、漢鏡、璧、武器、土器等ノ副葬品カ多數顯ハレタ。樂浪郡ノ內ニアツタ黏蟬縣ノ碑モ、平壤ノ西十二里程ノ龍岡郡ニ於テ、發見サレタ、此石碑ハ現在帝國ノ領土內ニ於ケル最古ノ

碑ニシテ、珍中ノ珍トスヘキモノテアル。此碑面ノ文字ニヨリテ、漢代ニハ大同江ヲ列水ト呼ヒシコトモ證明サレ、卽チ列水ハ或ハ臨津江ナリトシ、或ハ大同江ナリトシ、或ハ淸川江ナリトシ、内外史家ノ疑問トシテ居ツタ問題カ解決サレタノテアル。其後後漢ノ世ニ、樂浪郡ノ南部ヲ割テ帶方郡ヲ置キシカ、支那ノ書物ニハ「此後倭韓皆屬帶方」ト書イテアル。帶方郡ノ位置ハ多少ノ變遷アルモ、黄海道ノ砂里院附近ヲ中心トシテアツタコトモ、數年前ニ其附近ニアツタ古墳ヲ發掘シタ時ニ、偶然之レカ帶方郡ノ太守テアツタ張氏ノ墳墓テアルコトカ、其積ミ重テアツタ煉瓦ニ刻ンテアル文字ニヨリテ證明サレタ。尤モ後漢書

ニ前述ノ如ク、倭卽日本迄モ帶方郡ニ屬シタトアルモ、之レハ卽チ支那流ノ筆法テアル。

漢武帝カ朝鮮ヲ征服シタル後、五六十年ヲ經タル頃、鴨綠江ノ上流地方ニ高勾麗カ起ツタ。之レト相前後シテ、南朝鮮ニハ、新羅、百濟カ國ヲ建テタ。高勾麗ノ始祖東明王ハ、今ヨリ千九百五十五年前ニ、鴨綠江ノ上流富爾溝附近ニ都ヲ定メタリシカ、其子瑠璃王ノ時、鴨綠江上流右岸ノ洞溝附近國內城ニ都ヲ定メ、漸ク四隣ヲ蠶食シ勢强大トナツタ。東明王ノ陵ハ現ニ平壤ノ東南六七里ノ地ニアリ、韓國政府時代ヨリ今日迄、引續キ政府テ祭ツテ居ルカ、其眞僞ハ問題テアル。高勾麗ノ初期ニハ屢々支

那人ト相攻伐シ、樂浪帶方ノ領地ヲ爭ウタコトモアルカ、結局東川王ノ時之ヲ平定シ、次第ニ領土ヲ擴メ、西朝鮮ニ大王國ヲ建タノテアル。而シテ長壽王ノ時都ヲ平壤ニ移シ、威ヲ四方ニ振ツタ、卽チ其當時ノ領域ハ、南ハ今ノ京畿道漢江ノ流域ヨリ、北ハ間島地方ヨリ吉林長春以北ニ及ヒ、西ハ遼東半島ヲ包括シテ遼河ノ遙カ西ニ迨ンテ居ツタ。平壤ニ都カアツタ時代ニ、右ノ如キ大版圖ヲ有シテ居ツタノヲ見レハ、如何ニ平壤カ滿鮮ヲ支配スルニ地ノ利ヲ得テ居ルカヽ判ル。加之此時代ニハ最モ強勢ニシテ、支那ト前後七十年間ニ亘ル大戰爭ヲ爲シ、大ニ支那ヲ惱マシテ居ツタノテアル。高勾麗ハ七百五年間繼續シテ、遂

ニ新羅ト唐ノ聯合軍ニ滅サルヽモ、其最後ハ如何ニモ花々シカッタ。是ヨリ先キ支那ニテハ隋ノ文帝天下ヲ一統シ、海東諸國皆隋ニ朝貢セルモ、高勾麗ハ決シテ隋ニ通セサルノミナラス、兵ヲ發シテ遼西ヲ侵シタルカ故ニ、隋ノ文帝ハ大ニ怒リ、三十萬ノ兵ヲ擧ケテ來リ攻メタルモ敗北シ、其後文帝ノ子煬帝ハ大計畫ノ遠征準備ヲ爲シ、支那全國ノ兵ヲ擧ケテ自ラ之ニ將トシ、海陸併ヒ進ミテ高勾麗ヲ攻メタルモ大敗シテ歸リ、其後尙ホ二回ノ大遠征ヲ試ミタルモ、每ニ失敗シテ目的ヲ達スル能ハス、隋ハ之レカ爲メ國內疲弊騷擾シテ遂ニ亡ヒ、唐カ天下ヲ統一シタル後、英邁勇武ナル太宗ハ、更ニ二回大軍ヲ起シテ親征シタル

モ目的ヲ達スル能ハスシテ退キ、漸ク高宗ノ時ニ至リ、名將李績カ苦戰ノ後平壤ヲ陷レ、高勾麗王ヲ降伏セシメタノテアル。此ノ戰爭ハ古來滿洲朝鮮ニ於ケル最大ノ戰爭テアル、隋ノ煬帝親征ノ時ノ如キ、隋書ニヨレハ平壤遠征ノ兵數ヲ一百十三萬三千八百人二百萬ト號シ、其他餽運者ハ之ニ倍スト書イテアル。其他第五回ノ戰後ノ時、唐ノ兵白巖城ヲ陷レタ時ノ俘虜ノ數十五萬六千八百人アツタ程テアルカラ、兩軍ノ兵數モ餘程多カツタモノト思ハレル、此戰爭ニテ海軍ハ毎ニ山東角ヨリ出發シ、鎭南浦ヲ經テ、大同江ニ溯リテ來タコトモ注意スヘキ點テアル。

右ノ如ク高勾麗ハ平壤ヲ都トシテ强大ヲ極メタルカ故ニ、高勾麗ノ遺跡ハ平壤ヲ中心トシテ、近來所々ニ發見セラレツヽアル。牡丹臺附近、瑞氣山、停車場附近ヲ初メトシ、前記大同江對岸ノ樂浪土城附近ニハ、赤色ノ瓦片カ散在シテ居ル、之レ等ハ皆高勾麗時代ノ古瓦テアル、其他大城山跡及其麓ノ安鶴宮跡ナトハ有名ナル古跡テアル。殊ニ江西(平壤ノ西方約七里)及眞池洞(平壤ノ西約十里)ノ古墳ノ如キハ、恐クハ高勾麗王ノ墳墓ナルハク、僅カニ八年前ノ發見ニ係ルト雖モ、既ニ世上ニ普ク知ラルヽニ至ツタノミナラス、國寶トシテ尊重セラルヘキモノテアル。又從來內鮮人共ニ平壤ノ堤坊ナリト稱シタル、普通門

ヨリ安山ヲ經テ、練兵場及停車場西南方ノ軍用地一帶ヲ圍繞セル土堤ハ卽チ高勾麗ノ城跡テアル。而シテ古來箕子ノ井田ナリト稱シ來リタルモノハ、市街ノ區劃テアルコトカ判ツタ。高勾麗滅亡ノ五年前、百濟モ旣ニ唐ノ爲メニ亡ホサレタリシカ、當時我國ヨリ援兵ヲ出シ、白馬江ニ於テ唐ノ兵ト戰ヒテ大敗シ、我國ハ此時ヨリ遂ニ半島ヲ拋棄シタノテアル。唐ハ新羅ニ大同江以南ノ地ヲ與ヘ、新羅ハ此時始メテ朝鮮ヲ統一シタ、而シテ西朝鮮ニテハ唐ヨリ平壤ニ安東都護府ヲ置テ之レヲ鎭シタリシカ、後之ヲ遼陽ニ移シ、此地方ハ渤海國ノ領トナツタ。渤海ハ初メ粟末靺鞨ニシテ松花江ノ上流地方ニ在リ、高勾麗ニ

附屬セシカ、高勾麗亡ヒテ其衆多ク之レニ歸シ、漸ク盛大トナリ、其酋太祚榮ハ唐ヨリ渤海郡王ノ爵ヲ受ケ、十五府六十三州ヲ置キ、其領土西ハ開原ヨリ、東ハ日本海ニ至リ、北ハ「ハルピン」附近ヨリ、南ハ大同江ニ及ンテ居ツタ。渤海ハ建國ヨリ二百十三年ニシテ契丹ノ阿保機ニ亡サレ、新羅モ亦夫ヨリ九年後ニ、開城ニ自立シテ王トナリシ高麗ノ太祖ニ降リ、高麗ト契丹ト境ヲ接スルニ至ツタ、而シテ新羅ノ滅亡ハ今ヨリ九百八十三年前ノ事テアル。

高麗ハ新羅ノ版圖ヲ領シタルカ故ニ、大同江ヲ以テ契丹ト境ヲ接シタルモ、契丹ハ當時宋ト中原ニ角逐セルヲ以テ、此方面ヲ

顧ミルニ遑アラサリシニ乘シ、次第ニ高勾麗ノ舊地ヲ侵掠シ、鴨綠江附近迄領土ヲ擴張シタ、平壤誌ニハ既ニ高麗ノ太祖元年ニ、平壤カ荒廢セルヲ以テ、鹽、白、黃、海、鳳諸州ノ民ヲ移シテ之ヲ充タシメ、大都護府ヲ置キ、尙ホ平壤ニ都ヲ移ス考ヘテ大ニ平壤ニ城ヲ築イタコトヲ記シテアル。高麗ノ王都ハ開城ナリシモ、平壤ハ西北鮮ノ重鎭ニシテ西京ト稱シ、歷代ノ王ハ毎ニ此地ニ臨幸シ、或ハ大同江ニ樓船ヲ浮ヘテ歡樂スルヲ例トシタ。德宗ノ時北方防備ノ爲メ、鴨綠江口ヨリ寧遠和州ヲ經テ元山ノ北方定平ニ至ル間、卽チ半島ヲ橫斷シテ石壘ヲ築キタルコトアル故ニ、鴨綠江ノ下流地方ニ於テハ、同江迄ハ高麗ノ領

土テアツタコトハ明カテアル、此石壘ハ現ニ其古跡カ所々ニ存在シテ居ル。仁宗ノ時妖僧妙清ナル者王ニ勸メテ平壤ノ北三里ノ地ニ大華宮ヲ作ラシメ後平壤ニ據リテ反シタルコトカアル、大華宮ノ遺跡モ二三年前ニ發見セラレタカ、此反亂鎭定ノ爲メニハ平壤ニテ大戰爭カアツタ。

西暦千二百〇六年ニ蒙古ノ英雄鐵木眞帝位ニ卽キ、四方ヲ侵掠シ勢ヒ强大トナリ、千二百二十六年ニハ蒙古ノ太宗ハ高麗ニ侵入シ開城ヲ攻メ、更ニ南方忠州淸州ヲ侵シ殘虐ヲ逞フシ、高麗ハ臣ト稱シテ和ヲ請ヒタルニヨリ、蒙古ハ統監ヲ置キ政治ヲ監セシメタコトアリ、忽必烈ニ至リ高麗ニ命シテ船ヲ造リ兵ヲ

調シ、日本侵略ノ計ヲ爲サシメタ。此際高麗ノ臣崔坦等高麗ニ叛シ、平壤（西京）ヲ以テ蒙古ニ內附シタルニヨリ、蒙古ニテハ平壤ヲ東寧府ト改メ、黃海道慈悲嶺以北ヲ以テ之ニ屬セシメタルコトモアル。忽必烈ハ宋ヲ亡ホシ、都ヲ燕京ニ定メ、國號ヲ元ト號シ、日本遠征ノ爲メニ高麗ニ征東行中書省ヲ置キ軍事ヲ司ラシメタ。弘安大敗ノ後モ、再擧ヲ計ルノ目的ヲ以テ、依然征東行中書省ヲ置キシカ、元ノ衰フルニ乘シ高麗ハ之ヲ廢シ、平壤ニ西北面兵馬使ヲ置キ、西北ノ境界ヲ擴張セシメ、鴨綠江ヲ超ヘテ滿州ニ攻メ入リシコトアリテ盡ク其舊境ヲ回復シタ。元滅ヒテ明興リシカ、高麗モ既ニ末葉ニシテ政治日ニ非ナリシカ、

明ハ綠江附近ニ鐵嶺衛ヲ立テ、其附近ハ明ノ遼東ノ都司ニ屬セシメントシタルカ故ニ、高麗ハ大ニ怒リ八道ノ兵ヲ徵シ、浮橋ヲ鴨綠江ニ架シ、將ニ遼陽ヲ攻メントシタリシモ、人心既ニ去リテ亦心服スルモノナク、李朝ノ祖李成桂ハ時ニ右軍都統使トシテ陣中ニ在リシカ、世事日ニ非ナルヲ見テ、軍ヲ回シテ鴨綠江ヲ渡リ、反對黨ヲ除キ次テ王ヲ廢シテ自立シ、國ヲ朝鮮ト號シタ、時ニ西曆千三百九十二年ニシテ今ヲ距ル五百二十七年前テアル。

是ヨリ先キ明ハ元ヲ北方ニ驅逐シ支那ヲ統一シタルモ、固ト南方ニ興リシ故ニ、自然此方面ニ對スル關係甚タ薄ク、鴨綠江以

北及ヒ豆滿江內外地方ハ女眞族ノ諸部落割據シ明ハ名義上之ニ官ヲ授ケ賞ヲ厚フシテ其歡心ヲ繫クニ過ナカツタ。故ニ李朝初期ヨリ此地方ノ女眞部落ハ朝鮮ニモ內附シ、藩胡ト稱シテ朝鮮ノ節度ニ服シタ、朝鮮ニテハ或ハ官爵ヲ授ケ亂アレハ之ヲ討伐シテ居ツタ、故ニ事實上ハ朝鮮ノ屬領テアツタノテアル。此狀態ハ殆ント二百年間繼續シタルカ、玆ニ朝鮮ニ取リテ大問題カ生シタ、即チ右ノ女眞族中ヨリ滿洲(後ニ淸朝)カ勃興シタコトテアル文祿ノ役頃ニハ滿洲ハ他ノ女眞族ヲ併合シテ既ニ强大ニナツテ居ル、朝鮮王カ義州ニ出奔シタ時ニ後ノ淸ノ太祖トナリシ努爾哈齊（ヌルハチ）ハ使ヲ遣ハシ、援兵ヲ送ランコトヲ申込ミシカ、王ハ後

患ヲ恐レテ之ヲ辭シタルコトアリ、若シ當時王カ之ヲ承諾シタラハ明ニ援兵ヲ請フノ前ニ、稀代ノ豪傑努爾哈齊ト、勇猛ナル日本軍ト痛快ナル戰鬪カ有ツタカモ知レヌ、時ニ小西行長ハ平壤以北ニ進マス、曠日彌久遂ニ明軍ニ壓迫サレテ退却シタルハ人ノ知ルトコロノ如クテアルカ、彼カ初メ平壤ヲ陷レタ時ノ狀況ヲ當時ノ宰相タリシ柳成龍ノ著シタ懲毖錄ニヨツテ見ルト大略左ノ通リテアル。

卽チ是ヨリ先キ朝鮮ハ援ヲ明ニ請ヒシニヨリ、明ニテハ日本カ急ニ朝鮮ヲ犯シ、忽チ國都ヲ陷レ更ニ平壤ニ迫ルトノ報ヲ信セス、或ハ朝鮮カ斯ル口實ノ下ニ日本兵ヲ導テ明ヲ犯サントスル

ヤモ知レストナシ、遼東都司ヲシテ使ヲ遣ハシテ其狀ヲ探ラシメタ、柳成龍ハ其使者ト共ニ練光亭ニ來テ大同江ノ對岸ヲ望見シタルニ、一日本兵アリ對岸ノ林間ニ隱見シ、續テ二三人現ハレ偵察セルノ狀アルヲ見テ、其使者始メテ日本兵ノ迫レルヲ知リ馳セ歸テ復命シタ、時ニ日本兵ハ既ニ三日前大同江ニ到着シテ居ツタ、柳成龍カ再ヒ練光亭ヨリ對岸ヲ望見セル時、一日本兵カ棒ノ先ニ紙片ヲ挿ミ江中ノ沙上ニ樹テタルニヨリ、人ヲシテ之ヲ採ラシメタルニ、日本兵ハ兵器ヲ帶ヒス出テ來テ其人ト握手シ其背ヲ撫シテ極メテ欵狎ノ狀アリ、卽チ其書ヲ取リ開キ視ルニ、平調信僧玄蘇ヨリ嘗テ朝鮮ニ使シタル時、面識アル李

德馨ニ與ヘテ江中ニ會見センコトヲ申込ミタル書テアツタ。李ハ船ニ乘リ江中ニ出テヽ彼等ト會見シタルニ、彼等ハ日本ノ意ハ途ヲ朝鮮ニ借ラント欲スルノミナルニ、朝鮮ハ之ヲ拒ミテ事茲ニ至リシモノナルモ、今ヨリ一條ノ路ヲ貸シ日本ヲシテ中原ニ達セシメハ則チ無事ナラント稱シ、李ハ先ツ日本兵ヲ撤退シタル後ニ之ヲ議セント稱シテ此談判ハ遂ニ不調ニ歸シタ。茲ニ於テ日軍ハ陣ヲ江東ノ岸上ニ結ヒ、決戰ノ狀ヲ示セルニヨリ、王ハ平壤ヲ出テ寧邊ニ逃レ、諸將ハ平壤防禦ノ部署ヲ定メタ、日本兵ハ江ヲ渡ルヲ得ス、或ハ鳥銃ヲ以テ對岸ヨリ城內ヲ射ルニ、聲響甚壯ニシテ銃丸ハ江ヲ過キテ城ニ入リ、遠キモノハ大

同館（今ノ第一公立普通學校ノ建物ナリ）ノ樓柱ニ中リ、或ハ瓦上ニ散落シテ人ヲ驚カシタ、然レトモ累日渡ルヲ得ス、十餘屯ノ幕營ヲ對岸ニ結ヒ、警備頗ル怠リシニヨリ、朝鮮兵ハ之ヲ望見シ精兵ヲ擇ヒ、浮碧樓下綾羅ノ渡ヨリ、夜潛ニ船ヲ以テ江ヲ渡リ夜襲ヲ試ミタ。初メ三更事ヲ擧クル筈ナリシモ、時刻ヲ失シテ昧爽ニ至リテ漸ク渡河ヲ終リ、日本兵ノ未タ起キサルニ乘シテ其第一陣ヲ突擊シタ、日本兵一時ハ驚擾シタルモ、列屯ノ兵悉ク起テ逆襲シタルニヨリ　朝鮮兵ハ走テ船ニ還リシモ殺傷セラレタルモノ多ク、餘兵ハ王城灘ノ淺瀨ヨリ流ヲ亂シテ渡リ逃レ歸リニヨリ日本兵ハ始メテ淺瀨ノ徒涉スヘキ場所アルヲ知

リ、日暮衆ヲ擧テ此處ヨリ渡ツタ、然レトモ日本兵ハ城中ノ備アルヲ疑ヒ急ニ迫ラサリシカ、此夜守將ハ城門ヲ開テ盡ク城中ノ人ヲ出シ軍器火炮ヲ池中ニ投シテ順安及江西方面ニ逃レ去ツタ翌日日本兵ハ先ツ牡丹臺ヲ占領シテ城中ヲ觀望シ、城中空虛ナルヲ知リ乃チ城ニ入ツタノテアル。

小西軍ハ平壤占領後明人ニ詒カレテ空シク平壤ニ屯在シ、明ノ大軍ノ襲擊ヲ蒙リ平壤ヲ撤退シ文祿役ニ努爾哈齊ト接觸スルノ機無カリシモ、努爾哈齊ハ將來明ト覇ヲ中原ニ爭ハンカ爲、人馬ノ充實ニ志シ、豆滿江北方間島方面ノ部落ヲ征伐シ、或ハ招撫シテ滿州ニ充實シ、且ツ後顧ノ患ヲ絕ツ爲ニ時機ヲ見テ先ツ朝

鮮ヲ屈服セシメントシテ居ツタノテアル。
機ハ到レリ滿州ハ頻ニ明ニ勝チ千六百二十五年即チ文祿役後三十三年目（今ヨリ二百九十四年前）ニ都ヲ瀋陽（今ノ奉天）ニ移ゼントシタ。時ニ明ノ將毛文龍ハ鴨綠江沖ノ椵島ニ根據地ヲ置キ、朝鮮ヨリ糧食ヲ徵發シ、鴨綠江上流ヨリ滿洲ノ背後ヲ脅カシタ、此ノ時ニ朝鮮ヨリ滿洲ニ亡命セシ者等ハ、滿洲ノ兵ヲ借リテ朝鮮ニ復仇セントセシヲ以テ、遂ニ滿洲ニテハ此等ノ者ヲ先導トシテ朝鮮ニ攻メ入リ、各地ニ轉戰シテ、朝鮮王ヲ江華島ニ追ヒ和ヲ講シタ。此講和條件ニ依リ今マテ殆ント君臣ノ關係

翌年太祖即チ前記努爾哈齊死シ、子太宗立チ、益々四方ヲ經略

テアツタノカ、兄弟ノ國ト稱スルコトニナツタ、之レカ有名ナル天聰ノ和約テアル。此和約ニ依リ朝鮮人ハ大ニ屈辱ヲ感シ慷慨悲憤シテ居ツタ。然ルニ滿洲ニテハ其後八年ヲ經テ兄弟ノ國ヲ改メテ君臣ノ義ヲ結ハントシ、蒙古ノ諸貝勒ハ滿洲皇帝ノ尊號ヲ上リ、使ヲ朝鮮王ニ遣ハシ同シク臣ト稱セシメントシタ、一方滿洲ニ於テハ前戰役ニテハ未タ充分ニ朝鮮ヲ屈服セシムルニ足ラサルヲ以テ、更ニ大打擊ヲ加ヘントシテ居ツタノテアルカラ、茲ニ再ヒ開戰トナツタ、然ルニ朝鮮ハ到底滿洲軍ニ抗スル能ハス、連戰連敗王ハ京城ヲ出テ廣州郡ノ南漢山城ニ籠城シタ、此時滿洲ノ太宗ハ親ラ三軍ヲ指揮シテ之ヲ包圍攻擊シ、遂

ニ朝鮮王ヲ降伏セシメ、是ヨリ朝鮮ハ臣ト稱シテ滿洲ノ屬國トナリ、日清戰役ノ時ニ迨ンタノテアル。此歳ニ滿洲モ國號ヲ大清ト號シタ、清ノ太宗ハ歸途朝鮮ヨリモ兵ヲ出サシメテ明ノ兵ヲ海島ニ破リ、其根據ヲ掃蕩シテ後顧ノ患全ク無キニ至ツタ。加之朝鮮ト約シテ兩國共ニ封疆ヲ全フシテ相犯スコト無ク豆滿江北及ヒ鴨綠江北一帶に閒曠地帶ヲ作ツタ、此ノ如クシテ全力ヲ擧ケテ明ト戰フタノテアル。清國ハ後ニ遂ニ支那ヲ一統シ、都ヲ北京ニ移シ最近ニ至ツタノテアル。

以上ノ如ク西朝鮮ハ、約四千年前ヨリ一千年前ノ間ニ至ル、約三千年間ハ南滿洲ト同一ノ國テアツテ其都ハ主ニ平壤テアツタ

新羅ハ朝鮮ヲ統一シタルモ其領域ハ大同江以南テアツタカ、高麗朝ヨリ李朝ノ初期ニ於テハ、次第ニ領土ヲ擴張シ、或ハ首長ヲ内附セシメテ、鴨綠江以北ニ勢力ヲ張リシカ故ニ平壤ハ西北鮮ノ重鎭トシテ最モ重要ナル都テアツタ。後淸朝ノ勃興ニヨツテ退嬰主義ヲ採ルノ止ムナキニ至ツタカ、之レハ僅カニ二百數十年來ノコトテアツテ、今ヤ滿蒙ハ我勢力範圍トナツテ、歷史ハ繰リ返ヘシソウニ見ヘテ來タ。果シテ然ラハ平壤ハ經濟上政治上將來如何ナル地位ヲ占ムルテアラウ？

（完）

大正八年八月十五日印刷
大正八年八月二十日發行
大正九年九月十日再版

（定價金八十五錢）

不許複製

著作權所有

著者　篠田治策

發行者　平安南道教育會幹事　辻右作
平壤府山手町十七番地

印刷者　精華堂印刷部
大阪市南區安堂寺町四ノ六〇番地

發賣元　朝鮮平壤府南門町
脇坂文鮮堂
電話二四番、二四三番
振替貯金口座京城九二番

文禄役と平壌